

部報

昭和54年度



北
大
馬
術
部

No. **25**

北大馬術部

北大馬術部讃歌

作詩 三浦 清一郎
作曲 滝沢 南海雄

はるきたれば だいちひかーる
しろがねのえんざん ゆめほうぼうたり
たからかにいまぞいななけわれ
らしんめのほまーれあり
ほまーれあり ほく だい ほく だい お
お わがほこう われらしんめの
ほま ー れ あり

北大馬術部讃歌

一、

春来たれば、大地光る
銀の遠山、夢茫茫たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

二、

時来たれば 旗をかざせ
青雲の旅路に 意気軒昂たり
高らかに 今ぞ嘶け！
われら駿馬のほまれあり

三、

雲流れて 旅路遙か
青春の孤杖 泥濘はげめど
凜然と 進みて行かむ
駿馬のほまれあるかぎり
北大！ 北大！ おゝ我が母校
われら駿馬のほまれあり



お前ありてこそ

闘い抜きし

幾たりかの闘い

降りやまぬ雪に 春を望み

焼けつく太陽に 秋を待ち

お前と共に過ごせし

幾たびかの 春 夏 秋 冬

過ぎ行けど消えることなく

我がかたわらにお前あり

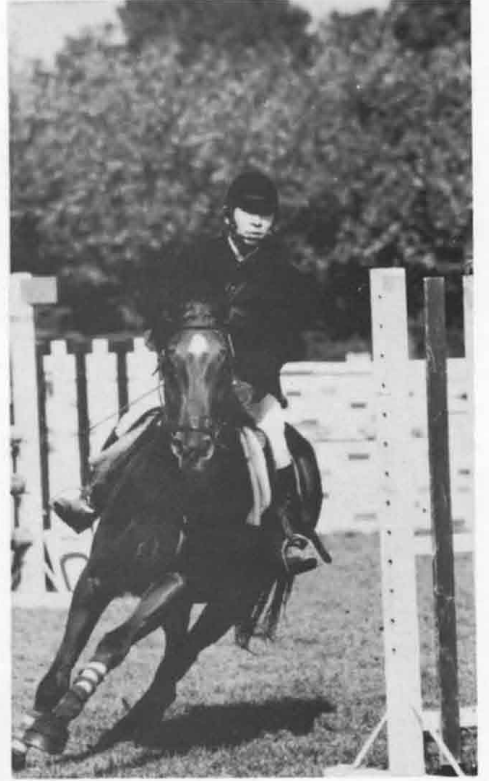
いつの日も共に生きて



北燕号と西川兄（全日学）



北姫号と国枝兄（全日学）



疾風号と島村兄（全日学）

北将号と吉田姉（道自馬）





天龍山号と石黒兄（北日学）



1年目日高合宿

巻 頭 言

部長 小池 寿 男

今年も卒業生を送る学年末を迎えることになった。今冬は一月頃までは暖冬とか少雪とかいわれていたのに、二・三月は記録的な大雪や寒さのみまわれ、三月末だというのに馬場をはじめ、まわりは雪に埋もれている。しかし陽光の中には何となく春を感じさせるものがある。

今年一年をふりかえってみると、部馬の故障は相変わらずというよりも、大きな故障馬を出した年といえよう。北楽院号は前年度末におこした左後肢第四中足骨の骨折で漸く秋頃から運動に参加したとはいっても、ほとんど一年を休養におくってしまった。さらに主力馬であるドンホッパー号も積雪によって低くなった柵から脱出しようとして左腹筋の断裂で危く廃馬になるところであった。また北燕号はアキレス腱の不全断裂が原因でついに離厩した。これらは部員の努力にもかかわらずちょっとした油断や不可抗力な原因で生じたものとはいえ、その後多くの負担を部員にかけることとなり残念なことであった。部馬全般をみると、主力馬であったスターライト号は十四才となり、羊蹄号の十三才、天龍山号の十二才など比較的高な馬がいる反面、まだ未調教の北将号、北姫号、北雛号などがおり部馬の交替期ともゆうべき様相を示している。大学の馬術部としては部員は四年で交替することを考えると、新馬の調教と自己の乗馬技術の練磨を両立させていくことには大きな困難性をかかえている。したがってこの点を如何に調和させ、乗切っていくかが次代へ

の活動の鍵となり、ここ一・二年がその苦しい時代となるものと思われる。

部の経理面をみると、赤字がつづいて多大な負担を部員にかけていたのが、多くの人々の努力と協力によって、ここ一・二年來黒字に転換したことは喜ぶべきことといわなくてはならない。しかし、その収入の内容をみると必ずしも一概に喜んではいられない。それは部員のアルバイトによる収入がなお相当の割合を占めていることである。馬術部活動はあくまでも課外活動であることを考えると、本業の学業へのマイナス面と、クラブ活動による人格練成などのプラス面とをどのように調和させていくかが問題である。支出を制限しすぎれば萎縮して、クラブ活動の目的を失なわせることにもなる。しかし、やはり大学生の本務は学業にあるから、本来転倒することなく、各自の若さと自律性によってそのバランスをとることを希望する次第である。

(昭和五十五年三月)

国体見たまゝ

監督 岡田光夫

今年の秋、宮崎県で開催された第三十四回国民体育大会馬術競技会に県から依頼を受けて審判に行ってきた。久しぶりに見る国体は何から何まで変っていて驚かされることばかりだった。私が国体に出たのは、昭和二十九年第九回北海道大会と昭和三十八年第十八回山口大会だから、数えて十六年振りになる。

今年の選手・役員の宿舎は太平洋に面した見晴しのよい海岸に聳える豪華なシーサイドホテルフェニックスと云う観光ホテルで、そこからバスで約二十分位離れた宮崎競馬場に通うと聞いてまづ驚ろかされた。山口国体の時は、取りこわし寸前の小学校を最後の御奉公とばかり取りこわしを中止して宿舎に利用した。したがって教室が寝室であり居室であったが、戸がなくて毛布を入口にたらしした所もあり、古畳の上に毛布四・五枚にくるまって寝た事を思い出した。その頃は、国体は質素にと云う事が方針であつたろうが、その後の高度成長時代を経て今日の様な姿になつたのであろう。出場馬についても例外でない。最近国体は国産馬でと云う機運が高まり、昭和六十三年度を目指して努力すると云う事を聞いているが、何も八年後を待たなくても出来るだけ早く実行すべきでないだろうか。国体と云う名前の上から云つても外国から高い馬を買ってきてよい成績を上げようと云う精神自体反省されなければならぬ。まして、その馬に価しない投資は勿論、調教の失敗で価いしなくなつた場合は猶の事、国家的損失と云わなければならぬ。

今回は、その外国産馬について調べてみた。国体プログラムの参加登録馬の中から拾ってみると、総数一五九頭のうち外国産馬が四十三頭、丁度二十七%が外国産馬と云うことになる。産地別に見るとニュージーランド・十九頭を筆頭に、アメリカ・八頭、オーストラリア・七頭、ドイツ・六頭、フランス・アイルランド・ソ連各一頭と云う分類になる。正に世界中から集めた様な感じで、正に経済大国ニッポンを如実に示している。因みに残る百十六頭の国産馬のうち約八十%に当る九十二頭が我が北海道産である事は、競走馬生産の北海道産馬の示める割合と非常に似ている事も面白い。今回の国体で、競技種目毎に入賞した馬を調べて見ると次表のとおりになる。

	国内産	外国産
成年障害	3頭	6頭
成年総合	4	4
少年障害	2	6
成年六段	7	7
小計	16	23
成年馬場	6	2
少年馬場	6	2
小計	2	4
合計	28	27

これによると、馬場馬術を含めると内外ほぼ相半ばするが、障害で

は断然外国産馬となる。馬場馬術で見る限り、外国産馬は二頭で共にドイツ産で成年馬場で共に五位、少年馬場で二位、五位を占めているにすぎない。これは、馬場馬として完成品を購入するのが高価にすぎるとか、馬場馬は手放したからなのか、国内で馬場馬術に對する関心が薄く、その購買に熱心でないのかいづれかであろうが、馬場馬術の前途はまだまだ遠い、と云わねばなるまい。

外国産馬の中では、福井県のペンハー（ニュージーランド産）が成年障害一位、成年総合八位、六段飛越八位の成績を上げたのが最高であったが、我が道産馬の帯広畜産大学の柏栄が、三枝選手騎乗のもとに成年障害三位、成年総合二位の成績を得ている事は特筆大書すべき事であり、ペンハー以上に安定した力を発揮したものと心からお祝いしたい。この意味に於て、北大又は畜大で本当に馬を愛し、馬も又それに応へると云う伝統的に馬作りに努力し、外国産馬におとらない馬を育成する事を心から祈る次第である。
玉も磨かなければ光りはしない。

創造の輪をひろげる

日特建設株式会社

取締役支店長 小池 栄 一

本 社 東京都中央区銀座8丁目14番14号
☎ (03) 542-9111 (大代)
札幌支店 札幌市中央区南13条西11丁目1251番地
☎ (011) 561-5326 (代)
旭川営業所 旭川市2条通り9丁目 士別信金ビル
☎ 22-1416 (代)
苫小牧営業所 苫小牧市新中野町3丁目11番地19号
☎ 34-4210 (代)
函館営業所 函館市五稜郭町1番13号 協栄生命ビル
☎ (0138) 55-5654

馬スキーと札幌馬スキー倶楽部顛末記

第六代部長 半 沢 道 郎

ヨーロッパの雪国では古くからSkijoringが行われている。ノルウエー語でSkijoring又はSkikjoringと呼ばれるウィンタースポーツでスキーヨリリング、又はシューヨリリングと発音するのではないかと思われる。字典や百科全書によると、雪上又は氷上でスキーヤーを馬又はモーターの付いた車で牽つてスピードを争うスポーツとされている。手もとにあるBrunns/WetlandのLunivers du cheval

には、スイスのSt.Moritzで行われた写真と簡単な説明が書かれている。それによると一九二三年（大正十二年）に冬の競技の公認の種目として取り上げられ、年二回二月に競技会が行われているようである。凍結した湖の氷上、または直線の路上で競馬の形式で競技が行われるので、可成り危険が伴うスポーツであると書かれている。

馬に装した鞆綱（革）にスキーを穿いて捕かまり、手綱で馬を御して競走するもので、鞆綱の長さは四メートル位で、馬蹄から飛んで来る氷片や雪塊をよけるために鞆綱に布を張っている。外国でも一般化された競技では無さそうである。

今年の二月八日の早朝HBCのテレビ番組の700が札幌競馬場で行われた馬スキーの実況が全国に生放送として放映された。当日は北大馬術部の部員も裏方の手伝いをしていたが、岡田光夫君と私は札幌競馬場の荻野忠二さんの厚意で、北海道に於ける馬スキーの発祥と由来を短い時間であったが、アナウンサーとの対談の形で放映された。早朝の生放送で見ている知人も居ないだろうと厚かま

しく出演したのであったが、前馬事公苑長の大本君や二・三の友人から見たという報せが来て、電波の恐しさを痛感した。

私は以前から北海道の馬スキーのこと、特に札幌馬スキー倶楽部の顛末を書き残して置きたいと考えていた。資料が散失してなかなか実現されないうで過ぎてしまったが、一部分を部報に投稿して纏める切掛けにしたいと思う。

先日札幌の中島公園にある市の教育委員会で設立した「さっぽろ冬のスポーツ博物館」に行つて見たが、冬季オリンピックの種目のもの、特にスキーに関するものを主とした見事な展示があり、図書等も集められていたが、残念乍ら馬スキーに関したものは一つも見当らなかつた。

昭和の初めの頃、北海道でスキーが大衆スポーツとして盛んになって、耕馬を持つている農家の青年や、牧場の人達の中にスキーを穿いて馬に曳かせることが始められた。北大の第一農場に当時は学生の乗馬実習用の乗馬が繋養されていたが、農場の職員や畜産学科の学生等が、最初のうちは人が乗った馬の鞍のところにロープをつけて路上でスキーヤーを牽張っぱっていたが、後には人が乗らないでスキーヤー自身が牽綱につかまって馬を御し乍ら滑走することも試みられた。また馬術部員の中でも本田桓康君や池内武夫君等は、兄さんの牧場や農場の馬で自分で工夫をして馬スキーを楽しんで居た。

昭和十二年頃、北大農学部の畜産学科の馬学教室の助手と農場の畜産部を兼務され、馬術部のOBで第五代部長をされた松本久喜先生（故人）、農場の職員で騎兵隊出身の荒野寅雄氏、北海タイムス社の社会部に居られた伝法貫一氏と私が主となって、馬スキーを北国の冬季スポーツとして普及発展させることを目的として「札幌馬スキー倶楽部」の設立を画策し、道の畜産課、北大馬術部関係者（元部長・OB・現役員）月寒にあった歩兵第二十五連隊、スキー競技関係者、近郊の農家の有志、同好者の協力・参加を得て、当時の馬術部長の太秦康光先生を会長に押し、堂々の陳答を整えて「札幌馬スキー倶楽部」が誕生した。

陳答

札幌馬スキー倶楽部主催の第一回の競技会が昭和十三年二月二十七日札幌神社外苑の札幌市立総合運動場で開催された。翌十四年には二月十二日に第二回を、以来昭和十六年まで毎年同じ円山の総合グラウンドで可成り盛大に開催し、犬糧の競技を加えたり、月寒に駐屯していた歩兵第二十五連隊の雪上演習の実演を行ったりしたが、十六年十二月大東亜戦争の勃発によって、その後の競技会は催すことが出来なくなり、札幌馬スキー倶楽部も自然消滅の状態になった。競技会は総合グラウンドのトラックに初めの年は単走の走路造り、一、二〇〇メートルのタイムレースをやった。出場した馬は北大の農場の馬、札幌愛馬会の馬、近郊の農家の馬等で、中間種と重種に分けて競技が行われた。後に円山公園をロードレースコースとして、牽引具は北欧のシーヨールリングを模して胸牽具に牽綱をつけ（約四メートル）両方の牽綱の端に九〇度の棒をつけ、馬と棒の間に雪塊よけの布を張り、スキーヤーはその棒につかまり、長い御者手綱を片手で持つか、肩にかけて御す方法を採用したが、後に胸牽にし綱の代りに竹の棒を使用し、馬が左右に動くのを防ぐと共に、速

度がついた時にスキーが馬の後肢に当たらない様に改善された。然し慣れた馬で上手なスキーヤー（御者）なら綱でもよいらしい。（競馬場では綱を用いている）。

（未完）

腕	旗	附	カ	バ	ト	メ	タ	手	記	記	出
章	幕	属	ップ	ッ	ロ	ダ	オ	拭	念	章	兜
	織	品	桶	チ	フ	ル	ル				

各種製造販売元

禮式国旗掲揚器発売元

株式会社 山 禮

〒060 札幌市中央区南1条西7丁目

TEL 札幌(011)大代表241-1641番

受信略号 「サツボロ」 ヤマレイ
 取引銀行 拓 銀 本 店
 振替口座 小 樽 2 9 0 9 番

人馬一体 (元主将から)

卒部生代表 西川理一

重心が一致すること、ハミを受けて馬のじゃまをしないこと。確かにそれもあるだろうが、僕が考えるのは、人馬一体とは人と馬の心が一つになることじゃないかと思う。伊式だ独式だ何式だといつても、そういう気持ちがある(人馬)になければどんなにうまくいっても、すぐれた馬でもうまくはいかないと思う。自馬を持つという事は逆にそういう事が出来るという事である。試合場で馬が飛ばないのは飛ばないような練習をしているからだと思う。あるいは馬との話し合いをとことんしていないからだと思う。練習の時、曳馬の時、それ以外の時、チーフである以上は馬を恋人のように、あるいは自分の子供のように思えば離れて自分だけが楽しい事は出来なはずである。また、そうして付きあっていたら馬の気持ちがわかってくるはずである。馬の方も人の気持ちをわかってくれるものだ。自馬っていうのは、それが出来るのだ。もっと馬の気持ちをわかってやれば、反抗したりはしれないと思う。チーフの中に、もし馬の気持ちがわからないという奴がいれば寝食を共にして、こっちの心を開けば、絶対相手も心を開いてくれると思う。馬の気持ちがわかれば、後は技術なり体力なりは諸先輩の話を聞くなり、本・フィルムを見るなりして磨けばいい。馬がその時、何を考え何を思っているかは、どんなうまい人に聞いてもわからない。馬本人に聞かないんだ。それがわからなくっちゃ馬も飛んではくれないだろう。お互いに相手の気持ちがわかれば、たとえハミをひっぱっても少々

荒っぽく拍車を入れても馬は飛んでくれるだろう。また普段、本当に可愛いがっていければ時には無理をいっても許してくれるんじゃないかと思う。

岩坪さんに聞いた事「伊式の根本は人馬の共同作業である」、岡田監督がよく言われること「馬ともしっかり話をしなさい」という言葉をもう一度かみしめてみたいと思う。

デザインから製品まで



株式会社
札幌メダル商会

本社メダルビル

中央区北一条西三丁目二二二一八四一

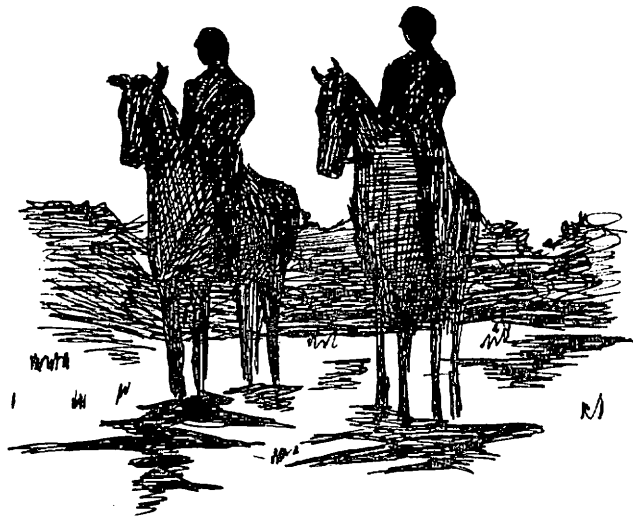
ススキノ営業所

中央区南四条西三丁目二二五一一〇八九六

目 次

○ 巻頭言.....	部長	小 池 寿 男	
○ 国体見たまま.....	監督	岡 田 光 夫	
○ 馬スキーと札幌競馬スキー倶楽部頭末記.....	第六代 部 長	半 沢 道 郎	
○ 人馬一体.....	元主将	西 川 理 一	
○ 役員報告			
主将.....	三年目	北 畑 裕.....	1
副将.....	三年目	松 岡 功.....	1
主務.....	三年目	高 橋 均.....	2
副務.....	一年目	築 地 和 彦.....	3
会計.....	三年目	篠 田 聖 児.....	3
馬匹.....	三年目	松 岡 功.....	6
飼料.....	一年目	斉 藤 牧 人.....	7
馬具備品.....	一年目	飯 野 秀 之	
	一年目	増 田 美希夫.....	7
作業.....	二年目	井 上 京.....	7
薬品.....	二年目	折 橋 由美子.....	7
文化.....	一年目	石 井 洋 行.....	8
記録.....	二年目	今 由美子.....	8
第 3 1 回全日本馬術大会・選抜中障害優勝.....			2 0
第 2 2 回全日本学生馬術大会.....			2 2
国立七大学定期戦.....			2 3
○ 調教報告			
スターライト号.....	三年目	松 岡 功.....	2 5
羊蹄号.....	三年目	篠 田 聖 児.....	2 7
疾風号.....	四年目	島 村 努.....	3 1
天龍山号.....	三年目	石 黒 直 秀.....	3 5
ドンホッパー号.....	三年目	高 橋 均.....	3 8
北燕号.....	四年目	西 川 理 一.....	3 9
北楽院号.....	三年目	松 岡 功.....	4 1

北姫号	四年目	国枝保幸	42
北将号	四年目	吉田円	45
北雛号	三年目	北畑裕	47
北皇子号	四年目	西川理一	48
○ 新馬紹介			51
○ 離厩報告			52
○ ハイエム号死亡報告			53
○ 水産学部馬術部活動報告			53
○ 先輩寄稿			
馬達との付き合い	特別後援会員	佐合義弘	54
祝勝会	(東京OB会)・昭和48年卒	横山豊昭	55
○ 卒部にあたって			
雑感		国枝保幸	57
馬術部って何だ		島村努	58
雑感		西川理一	59
四年間を終えて思う事		吉田円	59
入部した頃を思い出して		石黒直秀	59
○ 自己紹介・他己紹介			67
○ 名簿			86



昭和 54 年 1 ~ 12 月 決算報告

収 入

会計 篠 田

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	計
部 費 (入部金)	349,000	42,050	5,320	49,120	111,609	63,496	21,999	21,999	91,356	36,722	3,330	29,528	505,627
パ イ ト	0	240,350	240,000	0	30,000	14,000	0	0	14,000	482,200	128,400	4,000	2,131,990
補 助	20,000	0	0	93,000	0	33,000	23,000	23,000	20,000	12,700	132,000	96,000	1,737,000
他	32,000	16,320	12,780	12,000	58,903	71,100	22,000	22,000	189,800	262,030	122,000	6,100	812,583
計	86,900	298,720	258,100	154,210	200,512	181,596	66,999	66,999	315,156	907,952	1,345,370	135,628	5,187,200

支 出

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	計
飼 料	0	54,300	31,050	0	0	0	0	237,950	6,700	6,396	0	0	336,396
鉄	0	185,000	0	0	0	200,000	0	282,000	0	200,000	0	225,500	1,092,500
馬具・備品	6,500	90,000	6,500	48,050	8,215	25,410	96,090	25,080	11,645	54,730	77,040	620	449,880
薬 品	5,000	12,000	6,140	0	14,000	4,000	29,240	24,600	15,230	19,700	30,940	100,000	260,850
遠 征	23,500	0	0	0	11,250	50,200	119,850	177,925	0	70,648	105,200	0	558,573
文 化	2,605	5,018	3,900	1,070	21,600	18,846	18,326	359,763	13,611	24,407	8,410	8,608	486,164
記 録	600	3,800	100	85,190	5,816	0	0	1,796	7,580	33,880	9,000	6,440	156,042
雑 費	3,200	53,680	18,000	112,340	154,739	59,164	53,681	157,750	74,704	19,420	96,850	40,080	897,317
計	41,405	403,798	65,690	246,650	215,620	357,620	357,620	1,266,864	129,470	429,181	327,440	381,248	4,287,722

馬 匹

松 岡 功

昨年九月から島村兄より馬匹の仕事を引き継ぎました。表面的な仕事の内容は把握しているつもりですが、専門的な知識に欠け、経験も乏しいので、ほんのささいなことからはとんど獣医の先生方におすがりしているのが現状ですが、馬達の健康がクラブが成り立つ絶対条件であり、その責任の重大さを頭にたたき込んでがんばってゆくつもりです。

まず、馬の出入ですが、六月競馬場より北皇子号が入厩、十二月に北耀号が松井先輩のお世話で入厩、三月に北燕号を日高ケンタッキーファームに離厩、現在、牡馬一頭・牝馬四頭・騙馬七頭・計十二頭でやっています。北燕号は、昨シーズンを通して、右肩と腰がすつきりせず、また、十一月の全日学総合の野外騎乗で馬転し、左後肢アキレス腱を痛め、離厩することになりました。その他の各馬の状態は次の通りです。

スターライト……両前肢腱炎良好。

羊蹄・北将・北姫……異常なし。

疾風……右前肢繫靱帯炎良好。左後肢第四中肢骨ヒビ。馬休。

天龍山……両前肢繫靱帯炎良好。

ドンホッパー……両後肢滑液 炎良好。左腹側部腹筋損傷。除々に回復。左後肢蹄冠部裂傷によるフレグモーネ。

良好。

北楽院……左後肢第四中肢骨骨折完治。

北皇子……右胸打僕によるものと思われる血腫。切開手術後完治。
北離……左後肢管骨骨膜炎。良好
北耀……左前肢管骨骨瘤に熱あり。

昨年一月に骨折した北楽院は、レントゲン撮映を行い、経過を見ながら、十月に騎乗を再開し、現在、患部は後遺症もみられず、ほぼ完治しました。また、昨年十月から十一月にかけて、羊蹄、ドンホッパー、北離を中心に皮膚病が発生し、全馬に広がる勢いを見せていましたが、獣医学部の先生による治療で冬の到来とともにおさまりました。しかし、今後、暖かくなるにつれて、再発の危険性もあるので、十分な注意が必要と思います。また、アキレス腱を痛めて馬休中であつた北燕が、さくへきによるものと思われる軽い仙痛を起し、腹部のマッサージによって切り抜けてきました。今後も、さく癖のある馬に対しては、慎重な配慮が必要だと感じました。また、今年二月、ドンホッパーをパドックに放牧中、逃亡をはかり、牧柵にはさまり腹部を強く圧迫し、腹筋の損傷により血腫をきたし、患部が患部だけに、腹部ヘルニアの恐れがあるとのことでその後を憂慮しましたが、圧迫包帯を施し、約二週間安静に保った後、現在では、運動を再開しております。

このように、毎年言われることですが、人間の不注意、小さな怠慢が積み重なり、それが、大なり小なり怪我という形で馬達が苦痛に耐えて代償してくれていることを肝に命じておかなければいけないと思います。

さて、今後の予定としては、毎月の体重測定、飼糧状態が悪くなる春先に現われる骨軟症予防のためのビタミン剤、カルシウム剤の投与。また、インフルエンザ、破傷風、日本脳炎の予防接種を春に行い、この時期に伝染検査も行います。あと、できれば季節毎の血液

検査、糞便検査を行い、駆虫薬を投与したいと思っています。また、冬馬房から夏馬房へ変える時に、馬房の消毒を予定しています。

もうすぐ雪が融け、新しいシーズンが始まります。今年こそ、全馬元気に活躍できるように、部員一同充分手入れ管理し頑張ってください。

最後になりましたが、小池先生をはじめとする獣医の先生方、骨瘤や腱炎の予防治療にいろいろと気をつかいながら装蹄して下さい。太田さん、その他の皆さん、今年も何とぞよろしくお願い致します。

飼料

齊藤 牧人

飼料の任についた齊藤です。仕事を始めたばかりで、まだ一人立ち出来ず皆さんに迷惑をおかけしていますが、早く、円滑に仕事を運べるようにと努力するつもりです。飼料の経費がかかる折、各方面の皆様のご好意に本当に感謝しなければならぬと思います。今後とも、よろしくお願いします。

馬具・備品

飯野 秀之・増田 美希夫

新しく馬具・備品という役職につきました飯野と増田です。まだやりはじめたばかりで、わからないところも多いですが、二人でがんばっていききたいと思います。

作業

井上 京

あこがれの作業隊長になりました。やるべきことは山ほどあります。現役部員の諸君、愛馬のために、自分のために、作業をこなしてゆきましょう。終わった後に何かが残るような作業にしましょう。

薬品

折橋 由美子

この役職について三ヶ月が過ぎようとしています。薬品の値段

の高さに驚くばかりです。薬品を節約するには、部員全員に薬品が高価なものだと意識させるとともに、薬品の無駄使いを絶対させない必要があります。

不注意による体温計の破損等、部員一人一人にうるさく言って、気をつけさせなくてはなりません。

薬品の管理だけではなく、使用する部員の監視もしなくてはなりません。

又、自分ももっともっと一番効果があるが安い薬品を調べる必要があります。そして、現在使用している薬品を再検討をする事。

でも、何よりも怪我や病気を発生させない事が、一番の薬品の節約法です。

文 化

石 井 洋 行

文化になった石井です。三月に決ったばかりで、まだ仕事になれていませんが、なるべく早く早く仕事を覚えてやっていきたいと思えます。

記 録

今 由美子

記録の仕事は、馬体管理表などの印刷をしていけばいいというものではありません。他にやるのが沢山あるのにもかかわらず怠慢から手をつけていないことが多すぎて、いつもお叱りを受けている状態です。過去の記録は、保存するものではなく、活用しなければ意味がないのですから。

成人病保険のバイオニア

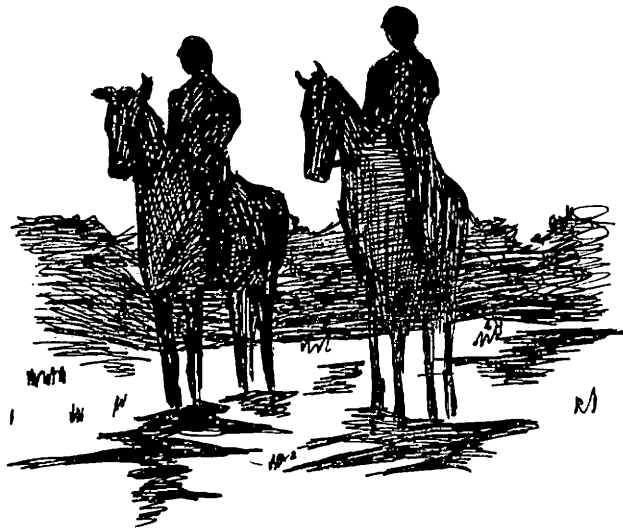


協栄生命(株) 北海道団体支社

札幌市中央区北大通り西九丁目
TEL二六一・二三四一

昭和54年度行事報告

- 4月3～9日 雪割り合宿(新二・四年目)
 馬術講習会
 18～22日
- 5月5日 第七回太秦杯・半沢杯・河田杯記念馬術大会(於北大)
 13日 遠乗会
 20日 対酪農定期戦(山下林)
 23日 新歓コンパ
- 6月2～3日 北海道自馬馬術大会
 (於日高ケンタッキー・ファーム)
- 9～10日 大学祭
- 7月19～23日 青草合宿(三・四年目)
 23～29日 日高合宿(一年目)
- 8月2～8日 北日本学生馬術大会(於北里大学)
 25・26日 北海道体育大会(於帯広畜産大学)
 9月15・16日 公認大会(於札幌競馬場)
- 10月6・7日 岩見沢親善馬術大会(於岩見沢競馬場)
 15～21日 一・三年目合宿
- 11月3・4日 全日本馬術競技会(於馬事公苑)
 17～19日 第二回全日本学生馬術大会(於馬事公苑)
- 1月2日 初乗り
 6～11日 正月合宿(一・二・三年目)



昭和 54 年度 戦績 報告

(A) 北海道三大学定期戦 (4 月 15 日 於 北大)

- | | | |
|----|-------|----------|
| 1. | 帯 畜 大 | - 6,775 |
| 2. | 北 大 | - 34,075 |
| 3. | 酪 農 大 | - 310.5 |

(B) 第 7 回太秦杯、半沢杯記念馬術大会 (5 月 5 日 於 北大)

<複 合>			馬場減	障 減
1. 吉 崎	フロンテア 乗 ク	スターフロンテア	156	0
2. 高 橋	北 大 (3)	ドンホッパー	$174 \frac{2}{3}$	0
3. 中 川	酪 農	騾 臣	189	10

<中 障>			減 点
1. 長 屋	北星乗ク	シ ャ ン ケ	0
2. 西 沢	札 競	ウルジャン	- 4
3. 長 屋	北 星	テ レ サ	- 8

<小 障>			減 点
1. 朝 妻	札 女 高	レインメーカー	0
2. 北 出	北 星	テ レ サ	0
3. 伊 藤	光 星 高	レインメーカー	0
石 黒	北 大 (3)	天 龍 山	0
篠 田	北 大 (3)	羊 蹄	0
井上(淳)	北 大 (2)	ドンホッパー	0

(C) 第 16 回対酪農大学定期戦 (5 月 2 0 於酪農学園大学)

<複 合>			障 減
1. 高 橋	北 大 (3)	ドンホッパー	0
2. 土 井	酪 農	騾 鷺	失 権 (3 反抗)
石 黒	北 大 (3)	天 龍 山	

<小 障>

				減 点
1.	手塚	酪 農	騾 鷲	0
2.	国枝	北 大 (4)	北 姫	- 3
	吉田	北 大 (4)	北 将	- 3
	雨宮	北 大 (2)	ドンホッパー	- 3
	篠田	北 大 (3)	羊 蹄	失 権 (3 反 抗)

(D) 第 14 回北海道自馬馬術大会 (6 月 12 日 於 日高ケンタッキーファーム)

<新 馬>

			減 点
1.	布施	北 星	チャキリス 0 (バラージュ - 0)
2.	平内	コウジョウ	日高育成 0 (" 0)
3.	安味	柏 友	カズミ 0 (" 0)
4.	森	柏 友	タニノヒロシ 0 (" - 4)
	国枝	北 大 (4)	北 姫 - 3
	吉田	北 大 (4)	北 将 失 権 (かまぼこ)

<中 障>

			減 点
1.	布施	北 星	ゼファー 0
2.	高橋	北 大 (3)	ドンホッパー - 3
3.	三枝	畜 大 (4)	柏 栄 - 4
	島村	北 大 (4)	疾 風 失 権 (垂 直)
	西川	北 大 (4)	北 燕 - 16

<初 心 者 >

1.	江里	日 高 ケンタッキー	ヒダカレディ 0
----	----	---------------	----------

2.	松岡	北大	(3)	スターライト	0
3.	鬼頭	畜大		柏蘭	0
	今	北大	(2)	ドンホッパー	0
	井上(京)	北大	(2)	北燕	0
	篠田	北大	(3)	羊蹄	0
	石黒	北大	(3)	天龍山	0

＜婦人＞

					減点
1.	布施	北星		チャキリス	0
2.	喜多	フロンティア		スタ フロンティア	0
	吉田	北大	(4)	北将	失権

＜パルクールドシヤス＞

					減点
1.	三枝	畜大		柏栄	1'10"4
2.	村上	北星		ゼファー	1'16"0
3.	土井	酪農		騾鷺	1'17"2
	国枝	北大	(4)	北姫	1'36"0
	西川	北大	(4)	北将	失権
	高橋	北大	(3)	ドンホッパー	1'25"8
	島村	北大	(4)	疾風	2'05"0

＜ピュイサンス＞

					減点
1.	布施	北星		ゼファー	0
2.	三枝	畜大		柏栄	-3
3.	土井	酪農		騾鷺	-4

(D) 北日本学生馬術大会 (8月2～8日 於 北里大学)

＜中障害＞

				(第一走行)	(第二走行)
1.	上妻	北里		フェアゲール	-3
2.	三枝	畜大		柏栄	-4
3.	麻野	北里		ブラックポパイ	-8
	島村	北大	(4)	疾風	失
	西川	北大	(4)	北燕	-30.5
	国枝	北大	(4)	北姫	失
15.	高橋	北大	(3)	ドンホッパー	失

石 黒 北 大 (3) 天 龍 山 失 失

＜ 総 合 ＞

				調 教	耐 久	余 力
1.	三 枝	畜 大	柏 栄	- 157	- 6	0
2.	麻 野	北 里	ブラックポパイ	- 145	- 20	0
3.	佐 藤	畜 大	柏 勝	-150 $\frac{2}{3}$	-10.8	- 10
	西 川	北 大 (4)	北 燕	-164 $\frac{2}{3}$	失	
	成 田	北 大 (4)	北 美	-183 $\frac{2}{3}$	-	- 50
	島 村	北 大 (4)	疾 風	-172 $\frac{2}{3}$	- 20	失
	吉 田	北 大 (4)	北 将	キケン		
	高 橋	北 大 (3)	ドンホッパー	-165 $\frac{2}{3}$	- 20	0
	石 黒	北 大 (3)	天 龍 山	-175 $\frac{1}{3}$	-2.4	失
	篠 田	北 大 (3)	羊 蹄	- 182	-181.6	失

＜ 学生賞典馬場馬術競技 ＞

				得 点
1.	山 本	弘 前	ハチクオー	513
2.	佐 藤	畜 大	柏 勝	497
3.	小 倉	北 里	ル ウ ー	495

＜ 第二課目 ＞

1.	前 野	北 里	コンコルド アナック	305
2.	田 口	弘 前	ハチクオー	303
3.	下 山	岩 大	若 桐	291

＜ B 障 ＞

				減 点
1.	北 畑	北 大 (3)	ドンホッパー	0
2.	増 田	畜 大	柏 栄	0
3.	福 田	酪 大	騾 閃 光	0
	キケン 篠 田	北 大 (3)	羊 蹄	

＜ 新人新馬 ＞

1.	平 野	東 北 大	育 駿	-1.5
2.	雨 宮	北 大 (2)	疾 風	- 4
3.	河 岸	畜 大	大 雪	- 5
オープン	篠 田	北 大 (3)	羊 蹄	-1.5

< 全日学出場権利は次の人馬が獲得 >

○中 障	ドンホッパー	高橋 (3)
○総 合	ドンホッパー	高橋 (3)
	北 燕	西川 (4)
	北 姫	国枝 (4)

(E) 北海道体育大会 (兼国体予選) (8月25～26日 於 畜大)

< 成年総合 >				調 教	耐 久	余 力
1.	佐 藤	畜 大	柏 勝	- 146	0	- 10
2.	三 枝	畜 大	柏 栄	- 161	0	0
3.	高 橋	北 大 (3)	ドンホッパー	- 161 $\frac{2}{3}$	0	- 10
	成 田	北 大 (4)	羊 蹄	- 183 $\frac{1}{3}$	失	
	石 黒	北 大 (3)	天 龍 山	- 173 $\frac{1}{3}$	- 110.8	失
	島 村	北 大 (4)	疾 風	- 172 $\frac{2}{3}$	0	失
	国 枝	北 大 (4)	北 姫	- 195 $\frac{1}{3}$	- 108.8	- 43.5

< 成年六段 >				減 点
1.	布 施	北 星	ゼ フ ェ ー	0 (三回目 - 12)
	広 川	岩 乘	ク 隆 孝	0 (")
3.	斉 藤	旭 川	スカイナス ホ ー ス	0 (二回目 - 8)

< 婦人壮年 >				
1.	喜 多	フロンティア乗ク	ス タ ー フロンティア	0
2.	井上(淳)	北 大 (2)	ドンホッパー	0
3.	折 橋	北 大 (2)	北 美	0

< 初心者 >				
1.	久 保	柏 友 会	ジープジープ	0
2.	糸 山	北 大 (2)	疾 風	0
3.	朝 妻	札幌スポーツ 少年 団	ド ミ ニ ク	0
	門 脇	北 大 (2)	天 龍 山	失

< 成年障碍 >				
1.	三 枝	畜 大	柏 栄	- 3

2. 吉崎	フロンテア乗ク	スタ フロンティア	- 4
3. 高橋	北大 (3)	ドンホッパー	- 8
島村	北大 (4)	疾風	失
国枝	北大 (4)	北姫	- 14

(F) 北海道地区馬術大会 (9月15～16日 於 札幌)

◀ サンジョルジュ賞典馬場 ▶ 得点

1. 荻野	札幌	競	オオカリヒメ	909
2. 久保	札幌	競	高千穂	690
3. 庄内	北星		サクラプリンス	287

◀ 第三課目 ▶

1. 庄内	北星		サクラプリンス	344
2. 吉田	社台ファーム		ベルベッ トガウ	334

◀ 標準中障 ▶ 減点

1. 桜田	北星		テレサ	- 3.5
2. 斉藤	旭川		スカイナ ース	- 4
3. 三枝	畜大		柏栄	- 7
高橋	北大 (3)		ドンホッパー	- 11
国枝	北大 (4)		北姫	- 11

◀ 婦人・壮年 ▶

1. 大友	帯広農高		柏栄	0
2. 原子	札幌女		ウルジャン	0
3. 長野	日高ケン タッキーファム		サマンサ	0

◀ パルクールドシヤス ▶

1. 斉藤	旭川乗ク		スカイナ ース	91"1
2. 高橋	北大 (3)		ドンホッパー	92"0
3. 吉崎	フロンテア乗ク		スタ フロンティア	100"2
国枝	北大 (4)		北姫	137"6

◀ コンビネーション ▶

1. 小野	フロンテア乗ク		ウインドン	3回目第3落下
-------	---------	--	-------	---------

2. 半田	旭川	サベルニック	3回目第2落下
3. 布施	北星	ゼファー	4回目第3落下拒止

<<小障碍>>

			減点
1. 北出	北星	テレサ	0
2. 喜多	フロンティア	スタニー	0
3. 大谷	旭川	フロンティア	0
根岸	北大(2)	スカイナース	0
松岡	北大(3)	ホーンス	-3
大久保	北大(2)	天龍山	0
篠田	北大(3)	スターライト	0
石黒	北大(3)	ドンホッパー	0
		羊蹄	0
		天龍山	0

<<大障B>>

1. 高橋	北大(3)	ドンホッパー	-3
2. 三枝	畜大	柏栄	-4
3. 荻野	札競	ウルジャン	-4

<<中障B>>

1. 小野	フロンティア	ウインドン	0 (バラージュ 0.42 ^{#3})
2. 福田	酪大	騾閃光	0 (" 0.44 ^{#2})
3. 久保	札競	ドミニク	-8
篠田	北大(3)	羊蹄	失
石黒	北大(3)	天龍山	失

<<コンソレーション>>

1. 新矢	フロンティア	アルビオン	-3
2. 嶋田	フロンティア	アルビオン	-4
3. 長屋	北星	チャキリス	-13.75

<全日本出場権利は次の人馬が獲得>

ドンホッパー 高橋 (3)

全日本馬術大会選抜中障害優勝！

高橋選手とドンホッパー号

昭和五十四年十一月三日・四日
日本中央競馬会馬事公苑

ドン・ホッパー 高橋 均 (3)

根 岸 泉

十月三十一日、ドン・ホッパーと高橋兄は、全日本・全日学と長い遠征に出発とうとしている。午前六時三十分、北星乗馬クラブのゼファーといっしょに東京へ向う。道中人馬共に変わりはない。

十一月一日、午前七時三十分、無事馬事公苑到着。馬房では、畜大の柏栄と北星のテレサが、ドンとゼファーの到着を首を長くして待っていた。北海道勢は、この四頭である。ドンは、長い輸送に疲れたのか、三十九度と熱が出たが、午後には平常に戻った。さすがに落ち着いている。

十一月二日、軽く練習。普段、ポケットしていると、飛び乗りもままならぬことのあるあの大きいと思っていたドン・ホッパーが、他馬の中で小さく見えるという噂は、残念ながら本当だった。大学受験の時を思い出した。回りの者が皆秀才に見えるというあの気持ち。だが、馬格は誰にも劣らぬ。キリッとひきしまった筋肉。無駄がない。実にかっこいい。

十一月三日、暗れ。いよいよ試合だ。今日行なわれるのは、中障

害、大障害(B)と内国産馬。ドンは中障害である。中障害は参加馬匹が多いため、AグループとBグループの二つに分けて行なわれた。ドンは、Bグループの五番、Aグループの柏栄は、満点で帰っている。試合前、全日本は全日学の馴致のつもりでやると冗談めいていた高橋兄も、さすがに緊張の色が現われていた。

四番の人馬が満点でゴール。

さあ、次は五番、ドンだ。ガンバッ！

スタート、一番・二番……とクリアー。ドン独特のあの大きなストライド。七番、クリアーしたかに見えた。が、無情にもパーは落ちてしまった。ほんの少しかすただけなのに。大きく足を当ても、落ちない馬もいるのに悔しい。八番以降はクリアーして、結局、一落マイナス四。優勝は逃がしてしまった。

明日は、A・B合わせて上位三十頭で選抜中障害が行なわれる。果して、ドンは出られるだろうか。不安が走る。いや大丈夫だと自分に言いかけ、高橋兄に大丈夫ですよと言う。兄は、表では、落ちついているようだが、やはり不安に違いない。

選抜出場を願いながら、内国産馬に臨む。またしても七番。七番は、高さ一二〇、巾一七〇の斜三段。一拒止、一落馬。ここでも期待した結果が得られず、選抜への不安がつのる。

その晩、ドンは疲れたのか、いやにおとなしい。明日は大丈夫だろうか。

十一月四日、小雨。天はドンを見捨てなかった。選抜中障害へ出るのだ。これほど実力のある馬が、見捨てられてたまるか。

試合は、オリンピック記念馬場、クランポンをつけて出場だ。

夕べから、ドンは、落ち着いているというよりは、おとなし過ぎるという感じだ。準備運動を見ている、何となく元気がない。待

機馬場で準備運動中、障害前で止まったり。高橋兄も、走路を走ったりして、馬の気分転換を図っているようだ。

朝からの小雨も上がり、いよいよ出番だ。満点は、日大のスズドクター一頭。可能性はある。ガンバッ！

スタート

一番、二番：クリアー。独特のムダのない飛びと大きなストライド。流れるような走行。きれいだ。五番は斜め三段。きのうより十センチ高い。大丈夫だろうか。それっ！クリアー。六番・七番、おっとかすった。落ちない。さあ八番、問題の水濼だ。去年はこれで、惜敗を喫した。飛べ！果して、旗は上がらなかった。難関は突破したぞ。残る難関は、最後のトリプル。ちよっとかすってヒヤリ。だ

が落ちない。満点でゴールイン。優勝の可能性は十分だ。
出口でドンを待つ。この時初めて、高橋兄の笑顔を見る。嬉しい。結局、ドンとスズドクターの二頭でバラージュ。スズドクターが先だ。

敵はアセル。タイムを意識してか、一落一拒止。

もう、優勝はドンがもらった。高橋兄、落ち着いて。ガンバッ！一つの障害をクリアーするたびに歓声が洩れる。アッ、五番の石垣が落ちた。あと一つ落ちたら負けだ。ガンバ！ここまで来て、と、また不安が甦る。が、運はドンについて回った。残りの障害はすべてクリアー。落下は一つだけだった。

優勝だ。日本一だ。去年の屈辱を晴らしたぞ。

「高橋選手、ドン・ホッパー号優勝です。」アナウンスが流れる。拍手が巻き起る。

OBが走ってくる。

「オメデトウ。」「オメデトウ。」

僕は、まるで自分が優勝したかのように、感激して声も出なかった。

北大は、北大馬術部は 健在だった。

感想・反省・裏話

全日本を見に行くからには、ぜひ、馬場馬術を見たいものだと思っていたのですが、見られなくてすぐ残念でした。でも特別大障害で、アンケが一八五センチを飛んだのを見て、感激というか興奮してしまいました。今だに、自分の目が信じられません。馬術もあそこまでいったら一種の芸術ではないでしょうか。馬は芸術作品であり、騎手は芸術家だ。

全日本を見る価値は、十分にあります。チャンスがあったら、見学し、目を養い、自分に生かせたら最高です。もちろん、自分が出場できれば、それに越したことはありませんが。

僕は、馬匹として付添って行っただけですが、ヘマばかりやっていて、高橋兄には、ずいぶん迷惑をかけてしまいました。

まず、カメラと八ミリを忘れてしまったこと。幸い、帯畜大が八ミリを持ち合わせていましたので、いっしょに撮っていただけだからよかったものの、写真は一枚もないのです。記念すべき優勝シーンなのに、深く反省すると同時に、帯畜大の方には感謝致します。

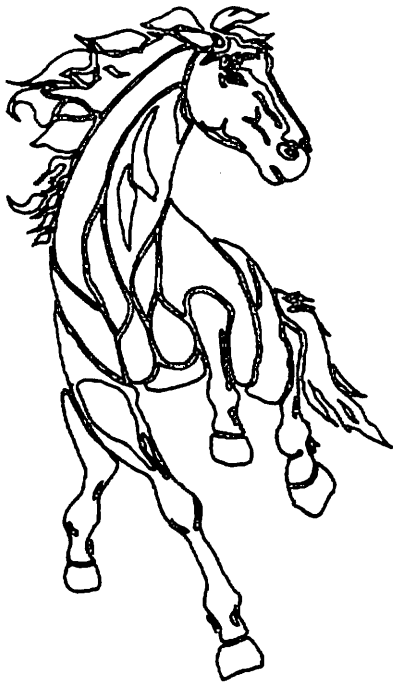
また、クランポンをつけるにも、これこそ馬匹の出番だと気負うばかりで、うまくいかず、結局、高橋兄の手を煩わしてしまいました。

その上、優勝が決まると、ハイ、お疲れさんと、鞍をおろしてしまい、曳き馬に行ってしまいました。乗馬で表彰式があるのも知らずに。おかげでマイクで、「高橋選手、表彰式です。乗馬でお願い

します。」「高橋選手、高橋選手。」と何度も呼び出され、とんだ恥をかいてしまいました。いそいで装鞍して、覆馬場のところから、速歩で入場。危うく間に合う仕末で、穴があったら入りたい位でした。

ところが、高橋兄はおとなしい人ですから、決しておこったりしないので（腹の中では、どうだか知りませんが）かえって、気が重いです。自分のような使えぬ人間を面倒みて下さったことに深く感謝いたします。それから感激のあまりというか、何となく照れくさくて、お祝いの言葉も言ってません。今、改めて言わせて下さい。

高橋さん優勝、お目出とうございます。



全日学「総合馬術」観戦記

第一日、調教審査——調教審査というと、何となく重苦しい緊張感が漂う。私の目では、細かい相違点まで見分けることができない。ただ点差の開きぐあいに驚くばかりである。しかし、専修大の山本選手と専剛号の馬場を見た時には圧倒された。主観的な表現しかできないけれど、人が馬のできる範囲ぎりぎりまでの要求をし、馬がぎりぎりまでそれに答えているとでもいうような迫力があつた。

我らが、高橋兄とドン・ホッパー号は、速歩馬場で少し乱れたが、それにしても、もう少し点がもらえてもよかったと思う。西川兄の跨る北燕号は、長い間の怪我による馬休を、まるで思わせないほど頭を下げてよく前へ出ている。これが本当のツバメかと感心するも点はドンより僅かに一点優るだけである。一方、国枝兄の北姫号は初めての全日学、初めての馬事公苑に興奮したらしく、まったく落ち着きがなかった。

第二日、耐久——昨日来の雨で走路は水田のようだった。障害はみな壁のように大きく見える。しかし、いざ試合が始まると、馬と人との迫力にすっかりひきつけられてしまった。高橋兄も、気合鋭く飛越して行く。しかし、9番の飛び降りはかなりつまって、観客から「危い。」と声が飛ぶ。馬場内でもつまり気味に見えたが、とうとう最終障害で一反抗。兄のくやしそうな顔。ツバメは6番の水濼で転倒して、西川兄も落馬した。それでも、出口の箱障害を乗り越え7番へ突き進む。だが、後肢が上がらない。蹄が、白い丸太の横木を削っていく。「かわいそうに。」という声が聞こえた。なあに、

七大戦報告

ツバメならやるさと思いながら後を追う。15番までスムーズに飛越して行く。それが、16番の走路から林へ飛び上がる障碍で三反抗をとられてしまった。西川兄はそのまま次の障碍へ向かう。しかし18番の埒を越えて馬場に入る障碍で、ツバメは前肢からつぶれるように馬転。西川兄は地面に突っおしたまましばらく立ち上がらない。一瞬ぞっとさせられる思いがした。国枝兄とミヨコは軽々と飛越していく。それが5番を通過して、走路へ出るコーナーを回ったとたん落馬。手綱の中央の金具がこわれ、ミヨコは走り去って見えなくなった。しばらくして本部の人が騎乗してきて下さる。兄は再び馬上へ。6番の水濂へ向かう。水の途中のドラムを飛んだが、出口の箱障碍で止まった。向け直そうと馬を返した途端に、ミヨコは一度飛んだドラムを逆から飛んでしまった。残念な失権だった。

第三日、余力一さすがにステイプルで帰って来た馬たちだけあって、ミスは少なかった。高橋兄とドンはつまり気味ながらも満点だった。結果的に、この総合馬術競技で、完全優勝を果たした専修の馬たちの、落ち着いた飛越が印象に残った。

最後に、今年の総合馬術など、馬場の得点で勝負がついたようなものだなあと思わせられた。北大にとってはつらいことだ。

今年は、三月に東北大学の馬場で行なわれ去年のように予選が馬場というようなことはなく全て障碍飛越で実施された。例年どうり予選A・B両リーグで各々リーグで総当りで、各リーグの1位と2位同志の敗者復活戦にて勝った大学との3校間で決勝リーグを行った。さて北大は、京大・名大と共にAリーグとなり、最初の名大戦は相手のミスに助けられ、又京大も名大に勝ち、京大との間で決勝進出をかけることになった。

仙台からの車中、高橋と松岡と小生（北畑）の三人で作戦を練ったときに、マークするのは昨年の優勝校京大と二位の東大それに地元の利を考えて東北大と考えていた。

決勝進出をかけての京大戦は、相手方に2年生がいたことと、後は少しのタイム減点を向こうがくらい、近差で勝ち、翌日の決勝進出を決め、まずはひと安心し明日の決勝もこの調子でと、やたら優勝が目の前にチラツキ始めた。一日目を終って、各大学皆同じ旅館に宿泊していたので夜、東大、九大、北大の連中で夜の街にくり出した。翌日の決勝は、結局この三校間で争われることになる。

さていよいよ決勝、九大×北大からはじまり、結果は二人食われて一人は引き分け、相手の総減点はマイナス4、当方はマイナス12であった。九大に敗れたことにより、精神的にかなり落胆してしまつた。予想通り、九大は東大にも勝ち、東大×北大で二、三位の争いとなった。東大戦は小生のポカで松岡、高橋の勝っていた分も帳消しにしてしまい。結局三位、ガックリ。当初全くマークしていなか

った九大が優勝をさらっていった。聞くところによると九大の連中は仙台にくる前に日大で合宿してきたとの話であった。敵も、いや皆優勝をねらっていたのだ。

医薬品卸



ホシ伊藤株式会社

本店 札幌市南八条西十四丁目一三九七番地
支店 帯広・釧路・北見・函館・旭川・滝川
室蘭・苫小牧・岩見沢



UHB
北海道文化放送



ドラマチック

興奮がある。緊張がある。快感がある。感動がある。
UHBは、エキサイティングな時間を演出します。

ないわけです。技術の未熟な私にはこれが大きな悩みの種でした。一年たった現在、ある程度改善されたようですが、やはり憶病で甘えん坊です。次にこれらのことを実行していくにあたって、無理をしないで高いレベルの試合にもっていくと考えないようにしました。まず、この一年間は小障を確実にゴールできるようにしようと考えました。

さて、最初私が騎乗するようになった時点での問題点として、右回転が悪い、停止時に粘る、特に速歩から常歩への減却時に巻き込む、頭が高い、等でした。そして前の騎乗者の木村姉には特に自分の脚を覚えさせること。そのための具体的方法として、自分の正しいと思う脚を使い、きかなかつたら拍車を入れ、よく動くようになったら、また元の脚を使いほめてやるようにと言われ、それを実行していました。停止で粘った時も拍車を使用しましたが、これは大変効果的でした。しかし、羊子は特に声に非常に敏感だったので、最初は口笛、声の扶助と、脚及び拳の扶助を併用し、正しく反応したらほめてやるようにして、なるべく拍車を最初から使用しないようにしました。右回転に関しては、最初のうちは大きな輪乗りを中心に運動して、外方拳を下げ外方の膝でおさえるようにし、絶対に右手綱から回転させないように心がけました。そして輪乗りを充分につめられるようになってから、普通の輪乗りを行なうようになりました。輪乗りができるようになって、最初のうちは蹄跡から右回転しようとする、首だけ右に曲げ走りまくることがよくありました。しかし、回転の前に膝を鞍に意識的に押しつけるようにして歩度を充分につめてから回転するようにしたら、そのようなこともなくなってきました。頭が高いことに関しては、輪乗りで丁寧な脚を使い、内方手綱を時々ほんの少し控えてゆずってやることによ

て、下げさせることを教わり、以後毎日その輪乗りを実行するようになりました。しかし、やはり輪乗りを解くと、とたんに頭をあげてしまうことが多かったので、頭があがってきたらまた輪乗りにもどるようにし、徐々に蹄跡運動を多くしていきました。それでも蹄跡では頭をあげて勝手に走る人が多いので、なるべく蹄跡では走らないようにしました。逆鞭の使用を勧められたこともありましたが、拳がついていきにくいこと、巻き込む恐れがあること等の理由から監督の助言もあり、ずっと持たないでやってきました。また特に蹄跡ではしばらく速歩を続けると、減却の時巻き込んで粘り、口をあげたまま走る、という状態がかなり長い期間続きました。これを直すのに一番苦労しましたが、やはり意識して膝を入れる、蹄跡上では減却しない、口笛、声の利用等によってかなりよくなりました。しかし、連続して大きな障害を飛んだなどは、まだスムーズにいかないことが多くあります。今後の課題だと思います。このようにして乗っているうちに、馬体が左に堅く、右にはきわめて柔らかいことに気がつきました。つまり右内方姿勢はとるのですが、左内方姿勢をとらせることができないのです。だから最初のうちは右回転に苦労していたのですが、左回転では肩から内に入ってしまうことに気づき、逆に右回転のほうがやりやすくなってきたのです。輪乗りでも右手前のほうが銜に出しやすく、左手前では首が外を向きがちで左拳にしか銜を感じることができませんでした。後に馬場の練習もするようになって特にそれを強く感じるようになりました。障害を切る時も左肩から避けることが多いし、左によれて飛ぶことが多くあります。原因としては、生来のもののほか、騎手が右に傾きがちであること、左内方脚の推進が弱いこと等も一因と考えられます。この点も結局充分には解決できませんでした。

次に障害に関して、試合をおいながら書いていきたいと思えます。障害に対して羊子はいわゆる突進屋さんでした。これは、やはり障害に対する恐怖心が強いからと考えられました。羊子は後駆のバネの強い馬で、飛越能力はすぐれており、速歩で一m三〇位は飛べる馬です。だから、障害に対する恐怖心を取り除き、騎手に信頼をおくようにする事が必要でした。しかし、騎手のほうはいわゆる引っ張り屋でした。これではうまくいくはずがありません。最初のころは、小さな障害でもよく止まられませんでした。羊子が突進屋であったので、飛んだらすぐつめる、という意識が強すぎたことや、羊子は引張るとその分だけ首を曲げてしまうので引っ張っていてもわかりにくいこと等も引っ張る原因ですが、要するに拳の感覚が鈍かったのです。そこで、引っ張るよりは銜をはずすほうがまだよいことだと考え、あまり大きくない障害でも思いきって前傾して拳を前におくり出すようにしました。この時には、踏み切るまでは銜をはずさないこと（拒止、逃亡につながる）、飛越後すぐ体を起こすこと（勝手に走らせない）に注意しましたが、これがなかなかうまくいきませんでした。しかし、それ以後障害に対してかなり安定してきましたように思います。こうして五月の半沢杯を迎えたわけですが、小障に出場し、タイム減点のみでゴールできませんでした。それまではほとんど速歩飛越しかやっていますでしたが、以後駈歩での飛越練習を徐々に増していきました。しかし、駈歩ではまだ勝手に走ることが多く、それを脚でつめることができず、拳を引きあげてしまうという状態でした。そうした中で、酪農戦の小障に出場しましたが、やはり障害間で走られてしまい、最終障害で失権してしまいました。羊子とはかく数多くゴールさせて思いきりはめてやる事が必要と考えていたのに、騎手のふがいなさから失権してしまい、非常に悔や

しく残念でした。その後すぐに道自馬があったわけですが、その間の練習で駈歩飛越の要領がつかめてきました。それまでは、速歩での連続飛越の次は、障害の前後駈歩、他は速歩、それができてから駈歩での連続飛越にもっていくと考えていました。しかし、羊蹄にとしては、駈歩での連続飛越のほうがむしろ簡単なことであるということに気づいたわけです。そして最初は善き乗りを繰り返して落ち着いてきたら障害を通過、また巻き乗りというようにして、次第に連続して通過する数を多くしていきました。また拳は背ミネに押しつけるようにして、絶対に引きあげないように注意しました。この感じをつかめたことが、非常によかったと思っています。こうして道自馬の小障では、だいたい思いどおりの走行ができ、満点でゴールできました。その後は野外障害の馴致と、大きな障害に慣らすことをやるようにしました。特にボリュームのある固定障害や、連続障害がきらいだったので、それらを多くやろうと考えていました。しかし、六月に一週間また七月に二週間実習があり、思ったように実行できませんでした。そのまま北日学への貨車積みが近づき、直前の野外、馬場内の経路走行で、いずれも一度拒止されたあと、膠着いてしまい、それに対して騎手はまったくどうすることもできず、試合を目前として目の前が真暗になったような思いでした。北日学は最初B障のみに出場しようかと考えていましたが、B障と余力はほぼ同じレベルであるので、思いきって総合にもエントリーしておきました。総合は耐久で大きな減点をくらないながらも何とかゴールしましたが、余力の第二障害ツイタテ三段で失権しました。耐久では三つの障害を拒止したのですが、二つめのときに少し膠着の兆候があり、三つめ止まったあとは完全に膠着してしまいました。この時は開き直ってひたすら馬が動き出すのを持って、何とか飛ばせま

したが、余力では障害間一分となってしまう失権しました。無念でした。次の日のB障は、とにかくゴールさせたかったので、新人新馬班にオープンで出場することにしました。前日までのことがありやはり不安がありました。この時点でも躊躇することなくいいペースでゴールできました。この時点で小障に関しては自信がもてました。このあと帰札した直後、不注意から私が新馬に腹をけられ、入院するはめになってしまいました。そのため次の道体には私が出場できず、他の騎手が総合に出場しましたが、耐久で失権しました。これは失敗でした。やはり無理をせず小障程度にすべきでした。その後退院したものの、またすぐに実習があり、結局乗り始めたのは公認大会の二週間前、九月に入ってからでした。公認までは、とにかく騎手の感覚をとりもどすことでせいっぱいでした。公認には小障とB障に出場しましたが、やはりあまり大きいのを飛ばせていなかったのと、騎手の騎座が不安定だったため、B障害は三反抗失権してしまいました。しかし小障害に関しては自信を深め、下級生でも大丈夫と思われました。そこでシーズン最後の試合である岩見沢親善では二年生を小障に出場させることにしました。そのころから以前の突進屋から、すっかり変わり、逆に障害前でつまって飛ぶことが多くなってきました。このため速歩飛越より駈歩飛越を多くし、障害の前に踏み切りをおいたり、aをきわめて小さくしたダブルを飛んだり、幅障害を多く飛んで、前進氣勢をやしなうように努めました。試合には婦人・壮年障害にオープンで出場し、小障には二年生を出し、私も馴致の意味で出場しました。かなり危ない所もありましたが、すべて減点でゴールできました。やはり何と言っても小障ではあったも二年生でゴールできたことが、一番うれしかった事でした。その後、公認で伝染させられたと思われる皮膚病が

ひどくなり、しばらく馬休にしました。しかし、全日学出場予定馬の馬体が悪かったため、予備馬として東京へ連れて行くことになりました。そこで以前から少しやっていた調馬索と自由飛越を本格的にやってみました。このうち、特に自由飛越は有効だったと思います。全く自分でも驚くほどボンボンとかなり大きな障害も飛ぶようになりました。二二〇のツイタテを飛んだときには、本当にびっくりしました。また騎乗して飛ばす時も、絶対に飛ぶはずだ、という確心をもって飛ばせることができ、飛越後の減却もよくなりました。全日学遠征の二週間位前から、再び騎乗しましたが、私は障害を中心にやり、監督さんに馬場のほうをお願いしました。こうして東京へ行ったわけですが、結局出場することはありませんでした。結果論になりますが、こういう中途半端な事をすべきではなかったと反省しています。監督さんはじめ、東大馬術部等いろいろな方にめいわくをかけてしまいました。この場を借りてお詫びとお礼を申し上げます。と思います。

羊子との一年間の試合を通じて次のようなことを感じました。まず拒止されることを恐れず、大きな障害を数は多くなくてよいからどんどん飛ばせるべきだということです。試合で二二〇を飛ばそうと思ったら、練習では一三〇を飛ばせておくべきです。きらいな障害としては割と大きく見える固定障害で、特にそれがダブルのbにあると、aが簡単なパー障害であってもaで拒止する傾向にあります。また、急回転のあとに障害が出てくると拒止しやすいようです。障害の前後で疾走することはほとんどよくありませんが、まだ連続して障害を通過すたあとの減却がよくありません。ただ障害前でつまる傾向にあるので、駈歩で幅障害を多く通過すべきだと思います。以上が未熟な私の調教報告です。羊蹄はいわゆる避馬といってい

いでしよう。しかし、能力的にはきわめて優れた馬です。それだけに私にとってはいよいよ先生でもありました。馬は手綱では曲がらない止まらないという事を身をもって教えられました。羊蹄で得たものを今後にかかしていきたいと思えます。最後にいろいろとアドバイスをして下さった諸先輩方、特にお世話になった監督さんにお礼を述べさせていただきます。本当にありがとうございます。

疾風号調教報告

騙 ア・ア 栗毛

昭和45年5月31日生

沙流郡門別町美原産

父 ア・ア オーバーマイン

肉 ア・ア ミストビハマ

体重 五五八Kg

島 村 努

疾風に乗って二年目であり、今年は自分の欠点を矯正し彼の力を充分に発揮させようと努力したつもりですが、結局、これまでの調教を崩し、全く悪い成績に終わってしまい、現役のみんなや、OBの方々に對し、本当に申し訳なく思います。

前年度の全日学で悪化した繋靱帯炎のため全日学後裸蹄にして馬休にし、二〇分位ずつ常歩騎乗を始めたのが、一月三十日の事でし

た。前年度は腱炎による馬休が多く、今年は筋肉痛による跛行で馬休を多くしてしまいました。自分の技術と、冬期間騎乗できなかった事による馬への不安というものが、自分をあせらせ、馬にも無理な運動を荷して、せっかく調子が上向きになっても、やり過ぎて調子を崩すという四年目としては恥ずべき誤ちを犯してしまった事を深く反省します。疾風は、もともと体の弱い馬ですが、乗れる時間が少くても自分の技術がもつと確実なものであれば、あせることもないだろうし、馬を短時間でよくすることもできるでしょう。やはり基する所は自分の技術であると痛感しています。

二ヶ月半の馬休により、体力・筋力ともかなり衰えており、また腱炎の再発の恐れも残されていて当分は常歩で細かい扶助の確認を行うことにし、馴致と肢に無理がかからないように体力を少しずつつけることに専念しました。脚に對する反応は、横に對しては割合敏感であったけれども、前後に鈍く、わがままであり、自分から歩くという馬自身の氣力にも欠けているようであり大きく歩かせることができませんでした。街の方へも行ってみましたが、馬休中にも曳馬で行っていたせいとか、興奮することはありませんでした。それでも、少しずつ前進氣勢が感じられるようになり、二月半には、あわせて一〇分程度の速歩で、少しハミをひく感じが出てきました。

しかし、二月十八日に乗ってすぐ右前肢に跛行をきたし、また一週間程馬休になってしまいました。その後騎乗した時には右前肢の跛行はなかったものの、今後は毎年起こる骨軟症という感じで、乗っていて力強さが全くなく、ちょこちょこしか歩かず、フワフワした感じでした。それから三月下旬までは本格的な思いきった運動はできず、だましまし乗って行きました。今思えば、完全に休ませてしまった方がよかったように思います。が、あの時、やはり焦

りがあったのでしよう。三月下旬より速歩飛越を中心にキャバレットに変化をつけ、レンガやタイヤを置いて障害飛越を行ないました。しかし、去年のような大きく肩を動かした独特な速歩をさせることができず、こんな筈じゃないと思ひ、それが骨軟症のせいなのか自分の脚がきかないのか自分でも確信が持てず、中途半端な運動を荷してしまいました。速歩が思うように出せなかったので飛越もいいものではなかったのです。それでもある程度の数をこなさなければと思ひ、また、もともと低くてもレンガを下に置いたものや、ごちゃごちゃしたものをかなり見るくせがあったので馴致ということも考えて続けました。

四月にはいって外乗を中心にキャバレットからの飛越を続けているうちに、外ではよく歩くようになりました。馬場内での速歩は重くはないが、まだあまりハミに出てこず、いい動きをさせようとして少し強めに受ければ、いい動きをするものの、これでは軽く受けて脚で追いついてくる強い緊張など成立しません。それでも馬場内各所の低障害飛越では、初めは障害直前で駈歩になってしまったのが馴れたせいか速歩通過できるようになりました。この頃、駈歩運動も少しずつ始めたのですが、ハミに出てこず、かといって勝手にひっかかる元気もなく、また、まだ肢が心配で、思ひきって出すようなこともできませんでした。四月も中頃になり、下の状態もよくなり、肢への不安もなくなってきました。外で速歩をやるようにして、外での興奮を利用すると、ハミに出てくるようになり、馬場内でも前進氣勢が出てきて飛越もスムーズになってきました。駈歩も馬場や外で、思ひきった歩度の伸縮をやっていくうちにハミに出るようになり小障害程度なら楽に通過できるようになりました。そして三カンポ前より追い込むようになりました。しかし、まだ、サイコ

ロなどポリウムある障害では三カンポ前からの脚に反応せず、硬直したような飛越でした。そこで恵迪裏の下の状態がよくなるのを待つて、ステイプルコースの障害を利用することにしました。外の方が出しやすいこともあり、これによって、少しずつ固定障害にも慣れてきました。また、馬場内の潦や水潦、恵迪裏の潦などは使用できるようになると同時に、毎日の練習中や曳馬で繰返しました。水潦は中々思うように行かず、スムーズに通過する馬のあとについて通過し、今度は一頭で通過できるようになってまた、次の日になると近づかないという日が何日か続きました。緊張させて通過すれば、どうということはないのですが、休めで向かうと躊躇してしまふのです。もともと、自然の川などは平気なのですが、人工的に作られた水潦を非常に嫌う傾向がありました。それでも何日か繰返すうちに、見るものの、休めで通過できるまでにはなりました。半沢杯の前で、経路回りを二回、個人的にも何回か経路を決めて行ないました。やはり大きめな障害になると三カンポ前からの脚に對して反応が鈍くなり、そこであわてて強い脚を使おうとしてこぶしが動き、返って邪魔する結果となっていることを指摘され、この点を特に注意するようにしました。それでも、一応複合程度なら満点で帰ってこれるといふことで、半沢杯の複合に出場することにしました。

しかし、ここで、自分の技術と馬への不安があり、試合前の練習と当日の準備運動でやりすぎてしまい、試合では、明らかに馬体の疲れを感じました。去年のような体力が、疾にはなかったのです。秋から春にかけての練習不足で、体力は衰えていたのです。疾への思いやりの気持ち、不安と焦りで欠けていたのです。結局思うように出せず、⑥番ダブルBで馬転、⑨番つい立て二段で一拒止、⑩

馬が素直に銜を受け、あふれる前進氣勢がその銜に出てくる。そんな事がこの馬でも可能だろうか、それは大きな疑問でした。ただその疑問に答えてくれた中島兄の言葉、「そう信じてやるしかないんじゃないか。」この言葉に大きく励まされました。

頭頸の伸展低下については逆鞭をかざすのが効果大でした。最初のうちは、銜を持って且つ逆鞭で無理やり下げさせようとする。と首を丸めてしまい素直に前下方に下げようとしません。そこであまり銜は強く持たず首を伸ばしていればよしとする所から始めました。その状態から徐々に口を持てるようにして行ったのですが、逆鞭に対して馬が慣れて来た為もあってか、それほど首を丸めてしまう事もなくなりました。

試合が近づくにつれてコンタクトを強めようとする時、どうしても頭を上げられがちになり、それを逆鞭で強引に下げようとする。又、首を丸める事になってしまいます。そこで、そういう時は逆鞭はあまり使わず拳を止めて口を抑え込むような感じでやって来ました。その方が制御し易く、自分としては乗り易かったのですが、馬にとっては窮屈を強いられていたかもしれません。この辺が伊式自然馬術の根本原理と大きなギャップを感じた所です。

『馴致について』

天龍山についての大きな課題のもう一つは彼の憶病な性格をいかにして克服するかという事です。馴致によって多くの物に慣らして行くのも当然ですが、根本的に恐怖心に対抗するには馬と人との関係、信頼感と服従心しかないと思います。普段接している時から始まって騎乗した時の態度、脚と拳、懲戒と愛撫、これら一つ一つが馬と人間との関係をつくり上げるのですから、その中に一つの明確なプリシプルが方針としてなければなりません。私の場合のそれ

はかなり甘やかすものであったと思います。

試合場に入ると馬の状態が一変してしまう。その事を痛感したため、何とか機会のある毎に北大以外の馬場で練習するように努めました。それも教えられる程に終わってしまいました。その中で感じた事は、天龍山は場所が変わる事に対しては、けっこう慣れていくというのか、他の馬場でもそれ程興奮しないのです。それが試合になると一変してしまうというのは、要するに場所の変化でなく、試合の雰囲気に対してビビるようです。なるべく多くの試合に出してやり、レベルの低い経路でゴールを切る事を繰り返し、馬に自信をつけてやる必要がまだまだあると思いました。

にが手な障害は、箱障害、連続障害、白い障害、ステイプルの第一障害、そしてシートであり、それらを重点にして練習しましたが、まだまだ改善されなくてはなりません。

シートに対しては、最初は馬場に置いたシートには五メートル以内で近づく事さえしませんでした。何か月か後にはどうにか広げたシートの上を歩くようになり、北日本のステイプルではシートをかけた障害をまったく躊躇せずに通過しました。私が天龍山に乗って出来た調教らしい調教はこのシート馴致ただ一つでした。ところが全日学出場の権利が夢となってしまったのは、北日本の余力でのシート入りの水濑でした。

『試合について』

五月、半沢杯、調教審査と小障害

調教審査については、他の試合全てそうでしたが、全く思ったようになりません。馬は頭を高々と上げ、銜などまったくおかないしにあたりをキョロキョロながめまわし、人間は脚を前方に放り投

げたような姿勢で、今でもアルバムの写真を見る毎に恥ずかしい気持ちでいっぱいになります。道自馬、北日本でもまあ大同小異でしょう。小障害は満点でゴールを切りましたが障害のレベルと馬のレベルを比較したら当たり前の満点ゴールでした。

五月 対酪農戦 複合

ゴール目前の連続障害で失権し、ゴールの速さを改めて痛感した試合でした。試合の後の馴致ではさほど苦もなくクリヤーできた障害だっただけに、自分のバランスの悪さ、拍車、衝の不安定が試合中の馬の不安をいかにかき立てたか感じさせられました。

六月 道自馬 初心者

数字の上では減点0ですが実質的には2反抗されたのをなんとかごまかした試合内容でした。

八月 北日本 中障二走行 総合

とにかく馬場の雰囲気慣らすためにも思い中障にも挑戦したのですが、まったく歯が立たずの結果で、無理やり押し込もうと障害に向けて、がむしやらに推しまくり、馬はさんざん頭に血が登って不信感がつるばかりでした。総合のステイプルに関しては、想像以上の出来で、天龍山の魅力を改めて感じました。人間はただ乗っかって障害に馬を向けるだけで、最初の数個の障害は不安が残っていたのですが、あとはただ馬を信じるだけでした。問題の余力は、ここが勝負どころと腹をくくって臨みました。第二障害で向ける方のみならずから一拒止されましたが、他はいつになく力強い踏切りで、もしかするともしかするなという思いが脳裏をかすめました。ところが魔のシート入り水潦、天龍山は障害前るか彼方でピタリと止まり近づこうともしませんでした。明らかに馴致不足と馬の人間に対する不信感でした。

八月 道体 総合

ステイプルの第一障害は問題があったのですが、やはりそれが現れてしまい、大きくタイム減点を食ってしまいました。他の障害はそのタイム減点を取り返そうと伸ばしっ放しで走らせたにもかかわらずほとんど苦もなく飛び、一つだけ逃避されましたが、これも慎重に向えば問題なく通過できるものでした。野外走行に於ける天龍山の安定性は素晴らしいの一語に尽きます。余力に於いては心配していた白箱で案の定止まられてしまい、二拒止後なんとか通過させたもののそれまででした。

その後公認大会で失権したり、岩見沢親善大会で北畑君に乗ってもったりしましたが、試合シーズン通して感じた事は、まず小障害程度ならば誰が乗っても安心して見ていられるという事。北日本の総合で全日学への権利を取る実力は十分に持っているという事。中障害で成績を残すには、まだまだ調教に問題があり、騎手にもかなりの技量が要求されるという事です。

.....

一年間天ちゃんに乗せてもらって、結果的には失敗で終わってしまいました。個人的な感想を言えば素晴らしい経験でした。誰が乗っても快適な馬と言うにはまだ程遠いのですが、降りて見る分には結構皆から人気もあるようです。北大馬術部にとって貴重な馬一頭であることは疑いませぬ。

私の後は折橋姉が乗る事になりましたが、彼女が乗っているのを見て、どうやら私よりも上手そうです。今シーズンこそはと期待しましょう。

ドンホツパー号調教報告

騾 中半血 黒鹿毛

昭和46年6月30日生

勇払郡早来町産

父 サラ オーシヤ

母 トロ ハゴロモ

体重 五三五kg

高 橋 均

二年目の十二月より、ドンのチーフとして一年過ごしてきたが、引き続き時代の状態を維持することができずに過ぎてしまった。というよりも、ドンの力を引き出すことができなかった。

乗り始めの頃は、下がかたかったりで、なるべくやわらかいところを選んでの輪線運動を主に行なった。乗りかわった頃は、重く感じられて（これは人間が前に出せなかったのだと思うが）とにかく前に出すように鞭を利用し、出たら静かについていくようにした。それと並行して、ただ前に出すだけでなく、つっぱった状態から、がくをゆずった状態で前に出るように心がけた。ある程度、がくがかたいので、がくをゆずらせるように注意して乗ったが、ゆずって人間の方での脚の推進と拳のゆずりが無い為か、すぐつっぱってしまった。それから、経路走行などは回転が実にスムーズなのが、ふだん左右の柔軟性があまり感じられず、内方姿勢をとるのに苦労した。この点では輪乗りの開閉、二蹄跡をやることによったが、人

間の技術が未熟な為、思うようにはうまくいかなかった。それでも岡田監督の指導のもとに、少しずつ内方姿勢をとるようになった。試合などで見られる大胆さと対照的に、ドンにも憶病な面が多く見られ、外乗などに行くと、ゴミだとかその他ちょっとしたものにも驚いた。そこで、馴致を兼ねて外来だけの日を週に一度とるようにした。

以上述べたこと以外、特に難点は見られず実に素直で適度な悍を持ち乗りやすい馬で、あとは如何に人間がうまく乗っていくかであった。日々の練習は、前述のことに注意して、あとは試合の経験を通して、失敗、成功を生かすべきだった。それが結局、一つの試合をステップに次の試合に生かすことができなかったことが、この一年何もしていなかったのと同じ結果になってしまった気がする。多くの試合経験をしながら、全くそれが生かされなかった。だから試合のたびに同じことを繰り返してしまっていた。何度も経験した試合の中で、自分なりにこれはいいと思った試合も結構あったが、その良かった時の状態、それまでの準備運動などの過程を把握できていなかった。そんななかで、夏の北日学の中障害第一走行で、水壕で三拒止をくらい、失権。おそらくこれは、馬なりではみに出していなかった為に（もともとかん塚、水壕を見る馬ではあるが）すきを与えてしまい、一度いやがった後は近づくことしなかった。全くこの時は、ショックが大きかった。この試合以後、ゴールをきれるだろうかという考えが、試合のたびにはなれなかった。第二走行は、もう絶対にゴールをきらねばならぬという必死の覚悟で臨んだ。とにかく前に出すことだけを考えた。はみに出て前に出たかどうかは別として、とにかくすきを与えず、ドンに飛ばねばならぬことをわからせた。結局、つめ伸ばしをしなかった為に障害につこん

での落下はあったものの、拒否なくゴールをきれた。この第一走行の失敗と第二走行の成功（成功という事に疑問は残るが）というこの経験が後の試合に生かされなかったのが実に一年を振り返って強く感じられる。

結局、全日本選抜中障で優勝した時も、経験を生かしての、こうやったから勝ったというのではなく、勝ってしまったというのが実感である。だから、このあと行なわれた全日学ではいい結果を出せなかった。

ようするに、馬の状態をよく把握できなかったこと、その為に試合のたびに迷いが生じたこと、障害飛越時の拳のゆずりが無い為、馬に苦痛を与え、その結果、馬にいや気をおこさせたことなど、全く人間側のミスによる試合経験を積んできてしまったといえる。

年を新たに、今シーズンはそれこそ、同じことを繰り返さぬようドンのためにも精一杯やりたい。

北燕号調教報告

騾 サラ 鹿毛

昭和46年3月14日生

勇払郡鶴川町産

父 サラ マタドア

母 サラ リュウウエア

体重 五四八Kg

ツバメとの二年間

明と暗（傷だらけの馬術部生活）

西川理一

去年一年間振り返ると四年間のクラブ生活の中で一番充実しているはずの年だったが、必ずしもそうとはいいきれないように思う。春先の半沢杯前までが馬術部生活で人も馬も最も充実した時期だったと思う。それから後は人馬共に故障続きで、無理して出た三つの試合が出て良かったのかどうか考えてしまうことがある。

ツバメとは二年間のつきあいで、二年生の終わりの頃は僕自身足首をケガしていたということもあって全く出せなかった。そしてシーズンになるにつれていくらか足のほうも直り、試合にも出るようになったが、そのころはただ前に出すだけ、障害は絶対止まらせな

いというのが僕の頭を支配していた全てだった。

三年目の全日学の時、練習中に初めて逆鞭に反応して、速歩で頭を下げてハミを前下方に引く感じがつかめた。そして七帝戦で京大の馬に乗り、前進氣勢を持ってかつ落ち着いて飛越する感じをつかみ、この二つの感じをいつも出せるようにと翌年から努力した。それまでツバメは回転が悪かったのだが、逆鞭によってとにかく頭を下げさせ、それに柔かくついてゆき、そこでどんだん脚を使うことよって前下方にひく回数が多くなり、左右の脚を常歩で中軸施回や前肢施回などで繰り返し教えていくうちに前下方に引きながら回転するようになってきた。あたかも馬が回転する方向に人の拳を持っていくように。(もちろんこの時も脚を使っている)

逆鞭と脚によって頭を下げさせ前下方へ引かせることが出来るようになって全てが変わった。減却もうまくいき、障害もバタバタせずに前進氣勢を持ちかつ落ち着いて安定して向かうようになった。

駈歩でハミをかませるといふこともよく分からなかったのだが、発進の時や速歩へ移行する数メートルの間のいい動きをするといわれたので、発進して拳を柔かく止めるようにして(それまではとにかく柔かく口についていこうとしていたし、脚で押し出すようにした。そしてもっとハミをかませようと思う時は、一旦伸ばしすぎにつめ、その時脚をぐいぐい使うとハミに出てくる感じがはつきりつかめた。ハミをかんだ状態だと実際動きが違い、回転も頭を上げさせないでやると小さな回転でもうまくいくようになった。

経路回りでもハミをかませるといのが分かったので、まずハミを意識しながら出し、脚を使いながらつめ、もう一度出してハミをかませながら障害に向かい、障害前で速くを見ながらハミに出てくる感じを意識して通過するようにした。(この時拳はいつも出来るだ

け下げる) そうすると安定して障害を回ることが出来、障害上でも口を感じ、着地後も手の内に入っていてコースを思うようにとれ、左によれることも無くなった。

そして、シーズン前にもう北日や全日学の事を考え、何とか前年の北大の汚名を挽回したいと思い、三月・四月に高さ一三〇中二〇〇の斜め三段なんかを飛び、まず半沢杯の複合と中障に優勝したいと思った。しかし、その前の練習でやりすぎ、結局疲労から練習中に足をドラムにぶつけ棄権、酪農戦も道自馬の事を考えやめ、道自馬では中障を帰っては来たが腰を痛めてしまった。北日学は試合直前の状態は良かったが、それまでの二・三ヶ月のブランクは大きく、第一走行の前半は僕にとってもツバメにとっても最高の出来で、一三〇の障害も無過失だったが、後半は息切れしてしまった。総合の調教審査は今まであせらせることが多かったので、準備馬場では普段の練習を信じ細かい事の繰り返しはやめ、速歩で頭を鞭で下げさせ、ハミをひかせることだけやった。出来はアピュイエ以外は割とうまくいったと思う。

全日学での総合の耐久。何もなかった。ミヨコの失権で団体はバ。元より個人としての成績を望むべきものは何もなかった。やるべきじゃなかったかも知れない。いや、たぶんやるべきじゃなかっただろう。だれかに一言やめると言われればやめたかもしれない。しかし、もう一度クラブ生活の最後にツバメと一諸になりたかった。そして、腹を決めた。

A区間からツバメは前へ出た。あせていた。今までの練習も調教も何も無かった。そこにはオレとツバメしかなかった。何の取り柄もない一人の人間と一頭の馬があるだけだった。ゴールを切ることは、その時頭に無かったと思う。人も馬も目の前にある障害に必

を経験し、北日学では中障・総合に出場し、公認大会では大障害で帰ってきました。しかし、全日学での失態は、乗り手の油断過信であったと言わざるを得ません。そして、彼女は飛びたかったにちがいないのです。

調教報告その1では、昨年三月頃までの事を書いたのでその2では試合を中心に報告していこうと思います。

今シーズンの初戦は、北大馬場で行われた三大戦、オープン形の形で小障程度の経路回りをしました。昨年の秋の初めての試合で失権後、最初の試合でもあり、相当緊張しました。昨年は、準備馬場の興奮に人間のほうがなすすべなく試合場へ入れるような状態、馬のやる気を出してやれなかったので、手綱をガッチリ持ち、かなり追って駆歩・障害をやりすぎと思える程繰り返しました。何度か繰り返すうちに飛越後の減却も少しずつ良くなり、騎手の気持ちも少し落ち着きました。

試合前の準備運動は、首すじにはんどのりと汗をかくぐらいが一番良いと言いますが、自分の準備運動はいつも過剰で興奮をおおるばかりでした。人間の不安感の表われが、やり過ぎの原因でもありました。それでも公認大会では、馬への信頼感・人間の余裕から馬の緊張状態をかなり把握できるようになった気がします。いずれにしても馬の状態を知るという事は、自分にとってこれほど難かしい事はないと感じられます。

四月・五月・六月とほとんど毎日曜、試合か経路回りもしくは他の馬場へ馴致にいきました。繰り返す事は調教にとってとても重要な事であると実感しています。特に下手くそな騎手にとっては技量のなさを回数で補わねばならないと思います。試合や経路回りで技

術上どれ程もの進歩があったかという自信がありません。ただ少くとも小障なら絶対ゴールを切るという自信がついたし、馬への信頼感につながったように思います。

普段の練習では、この時期試合が続いた事もあり、じつくりと丁寧に運動を組み立てる面がかけていて、舌を出す事が多く人馬の一体感に欠けていたのですが、試合への不安感が少しずつ和ぐにつれ運動内容も充実したものになっていきました。六月頃には軽い接触を保ちつつ脚を主体にする事に心がけ、舌を出す事も少くなり飛越中も拳を感じる事ができるようになった頃は、馬術のおもしろささえ感じられました。また、試合に関しては馬よりも人間の姿勢や随伴により気を配るよう心がけ、六月ケンタッキーファームでの道自馬パルクールを足がかりに北日学の総合・中障に望んだわけです。

北日学の中障害、結果的には二走行とも失権でした。第一目は癖を嫌われ三拒止失権。三回とも同じ様な向け方をした事も失敗であったが、壕馴致がうまくいかなかった事も大きな原因でありました。五月の酪農戦で壕障害が出た時も一拒止され、さらに溯り北大のステイブルコースの壕馴致にも苦勞した事などもあり、壕に関してもっと注意を払って向かうべきだったと思います。そして止まられたら次はどのように向けるか等考えて置かなければいけなかったと反省させられました。二日目はもう後がないという気持ちでガッチリもって強引に追って飛ばそうとスタートを切りました。狂ったように走りながらも、ミヨコは大きな飛びで障害をクリアしていききました。人間も必死でした。二日目も案の定癖で止まられたのですが、三度目になんとか飛んでくれたのも束の間、結局最終のトリプルCで騎手の随伴の悪さから右へ切られてしまいました。根本の原因はやはりいい状態で試合に望めない、馬のやる気を出してやれないと

いう点、人間の中途半端さにあったといえます。

総合競技は、北大のステイブルコースでもかなり走られた事もあり、最初の下見の時は、障害のごつさと距離の長さに緊張をこえて恐怖さえ感じました。下見を三度し、木の枝が出ている所まで頭にたたきこみ野外騎乗に望みました。勝手に走らせると逃避する可能性があったので第一から第三ぐらまではおさえ気味で走行し、第五を飛んだあたりからは、止まる気がしませんでした。まさに人馬一体感を味わったとともに、馬の能力の素附しさに新ためて感心しました。中障ではだめだったものの総合でなんとか全日学の権利を取る事ができ、道体の成年障害のゴールを目指す能力を確認しました。後は人間の技術と馬との折り合いです。

成年障害（道体）は失権寸前でなんとかゴールを切る事が出来ました。が内容のほうは全然で、ただただつっ走り、騎手はつぶれっ放し彼女の素直さだけでゴールを切れた試合でした。北日学では走られたのに比べ、道体では走らせた分だけ良かったと言えます。そして残りの部分は、彼女が助けてくれたわけです。

道体まで小障でも中障でもいい感じの試合が一つとしてなく、なかなか折り合いがつかない感じだったので、公認大会までは、障害に対する能力があるのだからと割り切って口向きを良くする事、脚反応を良くする事など基本に立ち戻り、軽い脚で拳を前に出すだけでスムーズに前に出、拳を止めて脚で減却する事を心がけスムーズな伸縮を多くやり、駆歩でも興奮させない事、ゆったりと駆歩させるように気をつけ、無駄な運動を避けるようにしました。公認大会での準備運動も輪乗りでじっくり術に出し、無理矢理障害を飛ばないような心がけ、試合では自分でも気持ち良く経路を回る事が出来、今までのようにつつ走る面がなく、障害前でゆっくり拳を出し、脚

を使えば自分から障害へ向かっていってくれました。壕の馴致と騎手の随伴など問題は残されていましたが、今までつかめなかった部分がやっとなつかめたようで少しほっとしたというのが正直な気持ちです。

九月の公認大会が終わり、十月の岩見沢親善大会は破行の為出場せず十一月の全日学に望みました。

全日学の失敗は既に書いたように乗り手の油断と過信にあったと言えます。公認大会以後、詰め押しがスムーズに出来るようになった面が逆に練習で強引に詰め押しをやるようになり、障害へ自分からスムーズに向かう良さを殺してしまった事、そして口向きに関して強引さから硬くなっていったことも事実でした。また馬事公苑では馬に今までになく落ち着きかけ、準備運動で馬の気持ちを自分の方に向ける事ができず、人も馬もオロオロするばかりでした。試合場に入りスタートを切った後も歯車が噛み合っていない感じで、心配していた四連続を無難にこなしたものの鬼門のトラケーンでつまづき失権してしまいました。二日目は開き直り馬に任ず様なつもりでスタートを切ったのですが第五障害で止まられ、壕以外の障害で初めて止まられるという場面を演じ、信じられない気持ちで目の前が真暗になったようでした。

障害で失敗した事で、総合では人間のおせりが災いし、水飛び込みの閉鎖障害を逆に飛び出し、手痛い失権を契ってしまいました。公認大会でつかめた部分を出す事も出来ず、二年間のすべてを失なったような形で全日学が終わり、そして今、ミヨコとのチーフとして部員としての付き合いも終わりがきたわけです。

報告を書きながら、自分の中で悔しさがこみ上げるのを抑えられ

北皇子号調教報告

編 栗毛

昭和51年5月12日 生

新冠郡新冠町産

父 アストラルグリーン

母 ハーバーガール

体重 五四八kg

西 川 理 一

今年の夏、中央競馬開催の時いただいた馬です。最初話があった時は、ダメだと思ったら獣医にもらってもらえばいいということだったので、機会を逸したと言おうか、もう少し様子を見ることになりました。

このギャランという馬は赤血球が少ない(他馬の半分くらい)とかいうことで、最初のうち激しい運動をして大丈夫なのかと思いましたが、運動を徐々に増すことで体力が少しずつついていくのじゃないかと思っています。性格は何か無理矢理やらせない限り曲がらないのじゃないかと思えます。(運動の組み立て方が問題。)

口向きは最近常歩速歩で前下方へ引くようになり、これを安定させたいと思っています。脚も少しずつですが分かってきたようです。落ち着きを失わない程度にどんだん脚を使ってハミを引かせることを今はやっています。最初から逆鞭に慣らし、馬にとって頭の上

うるさいハエでもいるという程度を考えながら、頭を上げればすぐに鞭を当てる、下げればほめてやる(この時絶対にひっぱらない)という風に条件反射を利用しているうちに、下げた時に脚を使うことによって前下方にひくようになってきたみたいです。

障害は大夫安定してきたようで、主に速歩飛越で出来るだけいろいろな低障害を数多く飛んで着地後口笛で止めて愛撫をしています。アプローチで鞭をかざして脚を使うとハミを前下方へ引きながら向かい首を使って飛ぶようになってきました。巾三・五メートルの三つのうさぎ飛びや高さをつけたキャバレットで障害飛越馬としての柔軟性を作りたいと思っています。人の方も随伴が今までブランクがあっておかしかったのですが、腰から体を前の方へ倒すのじゃなく尻を後へ押すようにすると安定感が良くなり楽についていけるようになりました。

馴致の方は当然のことながら最初は落ち着きがなく、少しの物音でもびっくりしてはねまわっていました。毎日毎日、曳馬にいくにつれて少しずつではあるが確実に落ち着いてきたようです。しかし、まだまだ車の音や動物の鳴き声で驚きはしますが、声をかけてやればいくらかおさまり、見慣れない物などにはフーと鼻を鳴らしながら近づいていくような所があり、進歩を急がなければ馴致はうまくいくと思います。鞍なども少しずつ慣れてきたみたいです。

冬の間は確実に体力をつけ、扶助を明確にわからせるようにし、馴致を怠らないようにして、来春を目指したいと思っています。

中古車と整備

民間車検工場

株式会社 **北大モータース**

札幌市北区北18条西5丁目

TEL 721-1526

Riding & Tennis

フロンティア乗馬クラブ

馬場 厚田村しっぷ165-3

TEL 01336-6-3858

居酒屋

飲むべし!!
食うべし!!
酔っぱらうべし!

ひでちゃん

北17条西4丁目 カネサビル1F
TEL 741-1303

営業時間 6:00PM~4:00AM

やまわ

ショッピングセンター

豊平区美園3条4丁目 ☎ 821-6248

新馬紹介

北皇子号

五十四年、六月に入厩した、栗毛のサラブレッドです。新冠町生れで、父はアストラルグリーン、母はハーバーガールです。入厩して間もなく、獣医学部で騙馬となりました。競走名はハーバーギャランで、今でも「ギャラン」の愛称を持っています。部馬としての命名は激論?の結果、「北姫といいベアになる」というわけで決定しました。彼も名前負けせぬようにと、今年からOBとなった西川兄の調教のもとでがんばっております。

北耀号

昭和五十四年十二月、OBの松井兄より入厩。地方競馬時代、十三勝し、ホースメンヒリュウと言う、中央に行きチカラスカイという競争馬名、名をピーター。明け十才の牡馬、北大に於て、北耀と命名される。馬格はよく、特に故障もなく、将来期待される。

洋菓子と喫茶

イレブン

喫茶部

北17西4 ☎721-0662

洋菓子部

新琴似8条8丁目
(四番通り新琴似生協向い) ☎762-6395

- ★ケーキセット (コーヒーor紅茶付)
種類が多く用意されています。
- ★クリームぜんざいの店
- ★お持ち帰りのケーキもあります。



旅人もキツ満足
美味... 北海の味

炉ばた・郷土料理・中国料理

 登御殿会館

さっぽろ・北4西4 予約電話 261-7851
251-4060

姉妹店 洋食 **アタスガ**
北3・西4 第一生命ビル

和食 登御殿

札幌駅地下名店街

離 廐 報 告

北 燕 号

昭和五十五年三月二十日、我が北大馬術部の歴史の一ページをさ
さえてきた北燕号が離廐しました。アキレス腱切断が原因で、障害
馬として再起は無理とのことでした。今では、すっかりやせて、あば
ら骨が浮き出している「つばめ」が思い出されます。

昭和五十年、彼は北大に入厩。一応彼もサラブレッドなので競争
馬にしようとしてテストを受けたが、他馬がゴールを切ってもまだ
たらたらと走って？いて、結局聞くところによると焼酎二本で話し
がついたとか。いかにも彼らしいエピソードだと思いが。一見みる
と牛の顔をした馬という感じで、どんぐり目で出っ腹で、太い足で
あの華麗な競争馬を想像すると、まるで正反対。サラブレッドとは
思えない体格なのです。でも、彼のいいところは人なつっこくて、
多芸で（えささえもらえなくてもやるから）、おとなしくて、結
構部員にも人気があったみたいですよ。

馬術的には欠点が多かったのかもしれないが、何しろ障害をぶち
こわしてもゴールを切るところが魅力の一つだったでしょう。

エース馬とは言えないかもしれないけれど、なくてはならない中
堅馬として、あと四・五年は活躍してもらいたかった。しかし、多
くの再起不能馬が廃用馬となることを思えば、日高ケンタッキーフ
ームで、観光客相手に第二の青春を送れて、むしろ幸せである。



北燕号離廐式

今度、彼に会ったら大きな声で「ツバメー。」と叫んでみよう。彼
も、精一杯鳴けない声で「ブヒヒー。」と答えてくれるであろう。
そして、我々も出来る限り応援していきたい。

ハイエイム号死亡報告

北海道大学水産学部馬術部活動報告

一昨年の九月に岩手県の遠野で、繁殖牝馬として余生を送る為に離厩したハイエイム号が昨年春にグラントマーチスの種つけに成功し、仔馬の誕生がまたれていましたが、おなかに仔馬ができたのがかえって災いとなって、離厩原因の右前肢「腱断裂」が悪化し、その為、蹄よう炎となり、昨年十一月に息をひきとりました。誠に部員にとっても残念ですが、最後まで世話をしていたいた菊地栄一さんに感謝すると共に、ハイエイムの冥福を祈りたいと思います。

合掌



晩年のハイエイム号

現在の我々を導いてきたダイパレード号を昨年の暮、離厩しました。性質がおとなしく物おじしない馬なので、ここ一・二年、初心者の練習用として乗っていましたが、年令からくる疲労で何度か倒れ、函館競馬場の方々と獣医と相談の上、市内の東山の牧場に引き取ってもらいました。

ダイパレード号は御年十六才の高齢であり、年々老化が進んでいくように、その老化をいかに抑えるかが、いままでの最大の課題であった。我々の調教の未熟さということもあるが、やはりよる年には勝てなかったようです。ダイパレード号はこの水産学部馬術部が、できた時からの馬であり、多くの先輩方に愛され、長年、苦楽を共にして、道を開き、築いてきた仲間であり、その勇姿をずっと我々は、忘れはしないであろう。ここで最後のパレードの担当の者として、満足に調教もできないで悪かったと思うと同時に、長い間本当にご苦労さんと言いたい。

このような現状で、新入部員とし、本学の馬術部にいた漁業学科二年の中島と食品学科二年の川越を迎え、現在部員は、三年目2名と計4名で、部員が少ないのが悩みの種です。自馬はいなくとも、函館競馬場の乗馬クラブや市内の東山の乗馬クラブへ通い練習に励んでおりますが、ただ漠然と馬に乗るというのではなく、その目的を持って乗っていくと考えています。今後とも、ご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

先輩寄稿

馬達との付き合い

特別後援会員 佐合義弘

住みなれた札幌をあとにして、東京に転勤して来たのは、丁度、桜が満開の時期だった、一月で十一ヶ月になる。

振り返ってみると、私が中国から引上げてきたのが昭和二十九年だから、まる二十五年間札幌に住んでいたことになる。この間ずっと北大の馬術部と、そして馬にお付き合いをしてきた。二十五年間は長いようでもあり、又、過ぎ去ってみると極めて短かかったとも思える。しかし、何んといっても馬との付き合いが私にとって一番の精神的、肉体的、休養であった。

私と馬の出合いは、昭和十六年五月、満蒙開拓青少年義勇軍で渡満した。当時は人より馬の方が大事とされていた時代である。私達が着いた訓練所は北安省嫩江界伊拉哈であった。ここは冬になると零下五十度(C)になる全満でも屈指の厳寒地とされていた。訓練所の南側は見渡す限り平地で四キロ程の所に川が流れていて老来川と呼ばれていた。訓練所の左前方に交通機関のかなめ伊拉哈駅があり、一日二本ぐらいの汽車が走っていた。現地の人達の部落は駅を中心に点在していたのと、第一次義勇隊開拓団の先輩達の第一部落と本部があった。何んといっても訓練所が大部帯で三百余名が住んでい

た。又、訓練所の裏側は小高い丘になっておりその丘の上には「拓士魂」と大書された十米程の高さの白い塔が建立されて訓練所を見下していた。これは、第一次義勇隊の先輩達が建立されたものだ。

こんな訓練所に私達が着いたのは春まだ浅い五月の中旬、そして私達と共に労苦を共にした馬達が着いたのはそれから一ヶ月程してからだった。日本馬が十頭、牛十頭、現地馬十頭、それにホルスタインとジャージー種の乳牛五頭、これで訓練所は一べんに賑かになった。

日本馬はそれぞれに血統書がついていた。そしてこれが私達の背丈が百五十種そこそこだから、でっかいものとして目に映ったのは私だけではあるまい、当然にもその取扱いは大変だった。その日本馬の最初の当番の一人に私も選ばれていた。私が担当する事になったのは「初浪」という四才馬だった。しかもこの馬は貨車輸送中に隣の馬に右後脚の飛節の上を蹴られて大怪我をしており、それが又、ひどい化膿をしていたのであった。私ともう一人の相棒とで毎日診療所まで治療に通った。時には厩舎に寝泊りして傷を見たりした。

この時以来、私と馬との付き合いが始った。一生懸命に治療した甲斐があつてか、私の馬、初浪は一ヶ月程ですっかりよくなった。

馬当番の一日は、夏も冬も朝の五時半に始まる。先づは厩舎のボロ出し、掃除、それに馬の手入れ、それから「拓士魂」のある小高い丘の上まで水飼いに行く。暗れた日は引き馬でこの丘までの約一キロは、極めて爽快だが、雨や雪、そして吹雪の日は辛かった。ましてや放馬なぞしたものなら、掘まらないし、叱られるし、こんな馬、ぶっ殺してしまえと思う事さえあった。

日本馬は全部名前がついていたが、現地馬や、牛には名前がなく、訓練所が伊拉哈だから、伊を頭につけて、チャン馬(現地馬の事を

私達はチャン馬と呼んでいた)には、「伊中」、「伊原」、「伊南」とかつけた。今でも記憶にあるのは「伊中」というチャン馬で、これが金付、そして無類の暴れ者、春の発情期は大変だった。丘の上の水飼い場に日本馬を連れていく中に何頭かの牝馬が発情している。これ「伊中」が知ったらもう手がつけれられない。竿立ちになるわ、

蹴っ飛ばすわ、先づ手綱なぞ持っておられない。放馬するや否や、日本馬の厩舎めがけて突進して来るのである。迷惑千万なのは私達、日本馬当番の方で馬を厩舎に入れ戸を閉めきって防戦にこれつとめる。皆さんで、寄って集ってやっとなら追っ払う始末、こんな事は月に何回かあった。チャン馬はともあれ、日本馬の方は私達隊員より大切であって、月に一度は関東軍から係官が来て調査をし、記録をとっていた。この検査を馬体検査といって私達にとっては大変に緊張する日だった。この馬達と、私にとっては「初浪」という馬との付き合い、苦楽を共にして来た事が現在に至っても尚、馬とは縁を切り難い関係が出来たのだと思っている。

北大ではミス・アップテールこと北楡との付き合い、そして今、東京では所沢乗馬クラブで、又、新しい馬との付き合いを始めている。

祝 勝 会 (東京OB会)

昭和四十八年卒 横山 豊 昭

毎年、秋の全日本、学生三大競技大会の時期になると、在京OB諸兄弟の中には、これらの大会の開催を心持ちにしてこられた方も少なくありません。

本年も東京世田谷の馬事公苑において十一月三日・四日の両日全日本馬術大会が開催され、選抜中障飛越において、高橋君騎乗のドンホッパー号が見事優勝の栄冠を勝ちとり、また、十一月十三日から十九日まで開催された全日本学生障飛越競技ならびに同総合馬術競技においても現役諸兄の活躍ぶりを観戦でき、参加されたOB会員一同は楽しい一日を過ごす事ができた事と思います。

東京OB会では、十九日夕方から馬事公園食堂において、この喜びを分かち合い、親交を深めるため、ささやかではありましたが、先輩、現役の諸兄弟を交えた恒例の祝勝会を催すことができ、東京OB会長、永松、武田両大先輩をはじめ在京OB諸氏、札幌からは上京中の半沢先生にもご出席をいただきました。席上、東園会長、半沢先生など先輩各氏からは、馬にまつわる昔日のユーモアを交えた興味ある逸話の披露や馬への愛着と心持ち、それに諸氏の近況などを、また現役諸兄からは自己紹介、馬術に対する考え方などを大いに飲み食べて、語り、親交を深め、参会者には有意義な時を過ごされたことと思います。

途中、優勝カップでの祝酒の廻し飲みのあと、一同で優勝歌「桑楡補紅」を歌い、最後に寮歌「都ぞ弥生」を合唱して、楽しい会の



最前列右から
 加藤(元)、本田、武田、永松、東園、半沢、玉沢の各氏
 前2・3列から
 千葉、横山、池田、半浦、2人おいて、八木沢、入江
 平井、笠間、千田、及び
 最後列右端
 平野の各氏

幕と致しました。
 なお、最後になりましたが、千葉幹夫氏には会場設営で、また佐合義弘氏にはOB諸氏との連絡ならびに援助を載き、誠にありがとうございます。誌上ではありますが、お礼申し上げます。
 それでは、来年も現役諸兄の活躍を期待すると共に、多数の方々の参加を望んでおりますので、よろしくお願い致します。

北はゆるさと

サラブレッド3才

クラシックへのプロローグ



日本中央競馬会札幌競馬場

卒部にあたつて

雑感

国枝保幸

馬術部の四年間もつと立派にやりたかつた。立派な部員になりたかつた。立派な乗り手、立派な上級生でありたかつた。様々な後悔が脳裏をかすめ、四年間続けた事実がわずかな自信の源となり日々暮す今、ふと現役部員達のグツとひきしまつた表情に気づき、自分もあんないい顔してたのかな、とひどくなつかしく、そしてうらやましくも思う。

大変なクラブです、確かに。役職交替をし、最後の試合を終えた後の解放感、その証しであるし、現役中、なんでこんな思いをして馬術部せねばならんのか、と何度思つたことか。反面、人に馬術部の大変さを語る事に心うれしく思つた事もあつたし、そんな時自分の馬術部は大層崇高な存在で、遂に自分という人間の卑小さを知らされ、立派になりたいと思ひ続けたわけです。

OBとなつた今、何が正しく、何が間違ひだと言ふのはたやすいけれど現役当時の自分には、大変さーそれがたとえ非合理さを含んでいてもーそれ故、やりがいがあつたのだろうし、意味があつたと思える。

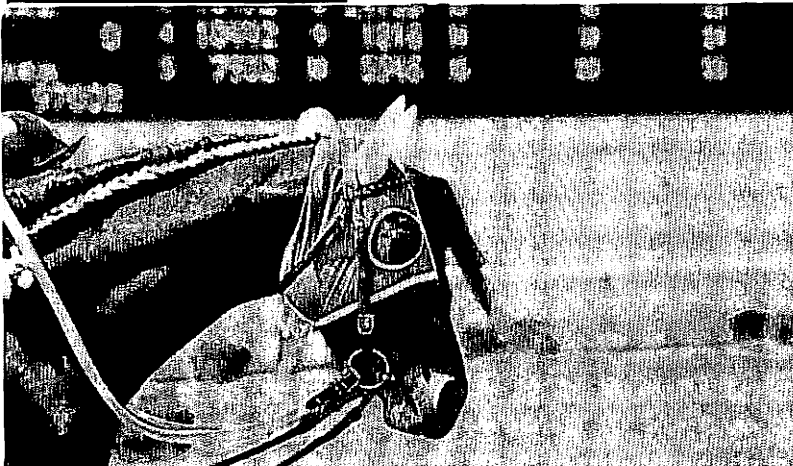
別に、大変であればあるほど良いのだというわけではない。要するに、自分の弱さ、卑小さを認めなくなかつた、のかな？よくわか

らん。はつきり言える事は、苦しい思をして面倒を見る馬達は、可愛しい、いとoshii。そして時に、やさしげなその瞳は苦しさを忘れさせてくれた。それだけでいい。

なんにしても、たいした事もせず四年間過し、ここに卒部の言を書けた事は幸せだと思ひます。そして現役の皆にも頑張つて卒業の言をかける自分になる事をおすすめします。



競走馬の専門紙



馬術部って何だ

島村 努

馬術部って何だったんだろう。卒部した今ちょっと考えてみた。

一年生の時、馬術部の実態を殆んど知らずに、馬が好きで、いや、どちらかといえば動物が好きで、そして馬に乗ってみたいという軽い気持ちと、大学に入って何かひとつやり通してみたいという気持ちをもって入部した。北海道の春を満喫しながら動いてくれない馬に乗った。下からの罵声の一斉射撃を受けとめながら、そして夏、長い遠征、貨車積、自分は普通の人間には味わえないような経験をしているという優越感と、逆に早く人並のふとんの上で寝たいという思いを胸にすごした。もちろん先輩の活躍を期待しながら。秋、初めてサブチーフになり、北隼の曳馬。牝馬をみてはブヒブヒと興奮したけれども、そういう馬を一人で曳馬しているんだという充実感。はじめての冬。真暗な中での装鞍。もういやだと何度も思いながら、殆んど意地だけで練習に行った。時々、五時十五分に目がさめて悩み続け五時三〇分を過ぎた時に大きな安心感を感じながらまた寝た。そして九時に目をさました時の何か重苦しい沈んだ気持ち。一月、北隼との悲しい別離。

二年目、いくら騎ってもうまくなれない。こんなことで先輩のようになれるだろうかと悩んだ。また、ちょっとでもうまく騎れた時の喜び。そして全日学の大感動ドラマ。二年目の終わり頃、疾風のチーフになった時の何ものにも変えがたい喜び。疾風の気持ちを自分に向けること、うまく動かせるようになること以外何も考えな

った。

三年目、さあ、いよいよだという意気込みと緊張感。毎日の練習に一喜一憂し、反省し疾風を少しでもうまく動かせたら、他のことはどうでもよかった。その日の気分は朝に決まった。あまり迷いというものは感じず、ただただ一生懸命だった。自分の未熟さを馬に助けられながらシーズンを終えた。全日学を終えて疾風の肢をこわし、疾風に騎れなかつたつらい冬。

四年目。この年は調教報告を読んでもらえばわかるのだが、敗北感という一語につきる。自分の学生生活は真暗だった。疾とクラブのみんなに對する申し訳ない気持ちと何ともいえぬみじめさ。何度も自分に、俺は一生懸命やったんだと言いつけて聞かせても暗い気持ちは消えなかった。実際、自分にはやはり甘い所があったのかもしれない。結局、勝てないようでは、自分自身満足な気持ちにすることはできないんだ。

馬術部って何んだろう。

続けた者だけが味わえる馬との素晴らしい関係。そして苦しみ、楽しみを共にすごした者だけが味わえる人間関係。学問だけでは味わえない学生生活を充実したものにできる所。そしていい加減な気持ちでは絶対に続けることのできないクラブ。自分は、ただ楽しいと思っただけのことではなかった。

今だから自信をもって言える。続けてよかったと。

雑感

西川理一

やっと普通の男の子に戻れると思ったんだけど何の因果かもう一年、新馬に乗る事になりました。

これからも先輩諸兄には、いろいろお世話になると思いますのでよろしくお願いします。

四年間を終えて思うこと

吉田 円

馬術部での四年間といっても、二年目の冬を境にして、全く異なる思い出を残しています。初めの二年間は、元気いっぱい楽しくて早起きも草刈りも雪かきも、皆、楽しく思い出されます。でも後半は、何をするにつけても素直に楽しめなくなっていました。その転機は「今の実力は問題ではない。今後の成長は男子の方が期待できる」との理由で馬が当たらなかった事にありました。その時から、クラブに対する信頼感は激減して、漠然とした疑惑が頭から離れなくなっていました。それでも今まで私を馬術部に引き留めてくれたのは、私のこんな気持ちを吹き飛ばそうとしてくれる同輩達の言葉や行動であり、馬との触れ合いの楽しさでした。これら

をもっと素直に受け入れられれば、又、楽しくすごせるようになったのかもしれませんが、結局、そうできないまま、期限を向かえてしまいました。

新しい馬配では、全員に公平に当たっていることを、何より嬉しく思います。私にとって決定的な打撃だった事は、繰り返されずに戻すように見えます。たまたま、今年は人数が少ないのでそうだっただけとしたら、話は別ですけれど。両由美子嬢は、皆と同じ機会を与えられたのだから、後輩の為に「やっぱり女はダメだ」と言われぬように頑張ってください。体力的なハンディは既に感じていることだろうけれど、それは努力で補える範囲のものであると信じます。OB諸氏から「女に任せておいては馬が駄目になる」と言われなくなる日を待っています。

時々、馬に乗る夢を見ますが、大抵、試合で失権する夢です。もっと楽しい夢が見られるようになりたかったナ。

入部した頃を思い返して

石黒直秀

馬術部に入ってから写真が、もう何百枚も溜ってしまいました。そのアルバム最初のページの一枚目の写真は作業の写真です。入部して、最初にやったその作業は厩舎の横のU字側溝を作る事だったんです。

当時、最上級生だった半浦さんが土木工学科でしたので、指揮を

とっておられました。その半浦さんが私にこう言ったんです。

「おい、石黒、おまえレベルを見ろ」

私も土木工学科の人間でしたので、当然水準器の使い方は知ってなければならなかったんです。測量の授業でも、もう既に水準器の使い方の所は済んでいたのですから……だもんですから、つい、

「はい、やります。」

と答えてしまったのです。まあ授業中は居眠り専門でしたし、実習の時も標尺を持って突っ立ってる役が主でしたから、まったく自信はなかったのですが、なんとかなるだろうと思って請け負ってしまったのです。……水準器の使い方、全然知りませんと言うのも恥ずかしかったものですから。

まあ、のぞいて見ればわかるかもしれないと思い、おもむろに、全てを知り尽くしたような顔をして、器械を覗いて見たら……はい、ちゃんと標尺が見えました。

溝を作る時は、水が流れるように一定の傾斜をつけてやる訳です。一メートル進んだら何センチメートルか下がるように。ですから溝を作る場所に一メートル間隔で標尺を置いて見て、それを水準器で覗き見たら、その標尺の目盛りが少しづつ一定に増えていけばいい訳です。それ位の事は理解していたのです。なにしろ大学生ですから。なにしろ土木工学科ですから。

そこで水準器を覗きながら私は、すごく偉そうに、すごく気どって指示したんです。いつもは自分の役である標尺持ちの人間に向かって、いつも自分が言われたような事を自信たっぷりの口調で。

「はいっそこ、もうちょっと上、あと二センチ位、ちょっとスタッフを前後に揺らして見て、ああ、上げ過ぎ、うん、そんなもんかなあ、はいよっ、はい次。」

ところで水準器で標尺を見ると、大事な事が一つあるんです。一番大切な所なんです。つまりその水準器は、地面に水平に据えられていて、視線は常に水平に移動しなければだめなんです。そうしないとまったく、だめなんです。話にもならないんです。でも知らなかったんです。

馬術部において作業は、避けて通れない一つの義務みたいなものです。それがたとえ辛いものであっても、いや辛ければ辛い程に、馬の上で浴びる春の日差しは暖かく、夏の風は涼しいのです。ですから後輩の皆様、作業は頑張りましょう。

作業の中には、時としてU字側溝の清掃があるかもしれませんが。いわゆる「どぶさらい」です。その時、もし水が流れていなかったらゴメンナサイ。でも作業がたとえ辛くても、その時は、是非なつかしい気持ちで石黒先輩の顔を思い出して笑ってやって下さい。

馬は友。

都会を離れたのも
たてがみにふれたくて

会員募集



日高 ケンタッキー ファーム

乗る 日高ケンタッキーファームは、大自然の中で本格的な乗馬が楽しめる日本唯一の牧場です。安全には万全を期していますし、初めての方でもすぐ乗れるように指導もいたします。乗馬場は角馬場と3つのクロスカントリー・コースがあり、技量によって楽しめます。

会員特典

- ① メンバーズルームの使用権
- ② メンバーズロッジの使用権（有料）
- ③ 乗馬、テニス・コートの使用は、会員を常に優先し、これを会員特別料金とする。
（会員以外の場合、乗馬、テニスはできないことがあります。）
- ④ 年2・4回の特別催事情報提供
- ⑤ 北海道の農産物・酪農製品・海産物の直送サービス
- ⑥ 代表者を定め他の2名を連記とするファミリー会員制
- ⑦ その他、提携先施設、又はスキーバス等の利用において、数々の特点があります。

入会保証金
お申込み

（10年間据置、7割返還）道内会員 30万円 道外会員 20万円

（旬）日高ケンタッキーファーム 北海道沙流郡門別町字福満 128番地 01456②0811・②2192

●日高ケンタッキーファーム料金表

施設	会員	一般入場者	
入場料 (管理費として)	大人 無料 小人 無料	200円 100円	
ベンション(1名、食事なし)	2,000円	3,500円	
ファミリー・ロッジ (7名まで)	10,000円	25,000円	
マツシヨールームロッジ (7名まで)	12,000円	26,000円	
スイートピラ(4名まで)	16,000円	28,000円	
バンガロー(4名まで)	6,000円	12,000円	
ユテージテント(6~8名まで)	5,000円	10,000円	
貸テント(4・5名用)	3,000円より	5,000円より	
乗馬	外乗 Aコース	150円	300円
	Bコース(添じょう付)	1,000円	2,000円
角馬場	15分	1,000円	2,000円
	(指事付) 30分	2,000円	4,000円
テニス (1時間)	7・8月を除く平日	500円	1,000円
	7・8月の平日と土日祭日	1,000円	2,000円
釣り堀(場内)	無料	300円(料)	



[卒部生]



左より 吉田姉、島村兄、西川兄国枝兄、石黒兄

[3年目]



左より 北畑兄、篠田兄、松岡兄、高橋兄

〔2年目〕



左より 井上兄、折橋姉、今姉

〔1年目〕



上段左より 間正姉、平田姉、石井兄、飯野兄、斉藤兄
下段左より 桜井姉、平田兄、増田兄、築地兄、小泉兄

馬達



疾風号



スターライト号



北楽院号



北美号



北将号



北驢号



北姫号



北皇子号



天龍山号



羊蹄号



ドンホッパー号



部犬キョン



北耀号



タマ

ススキノの夜を憩う

ぼんち

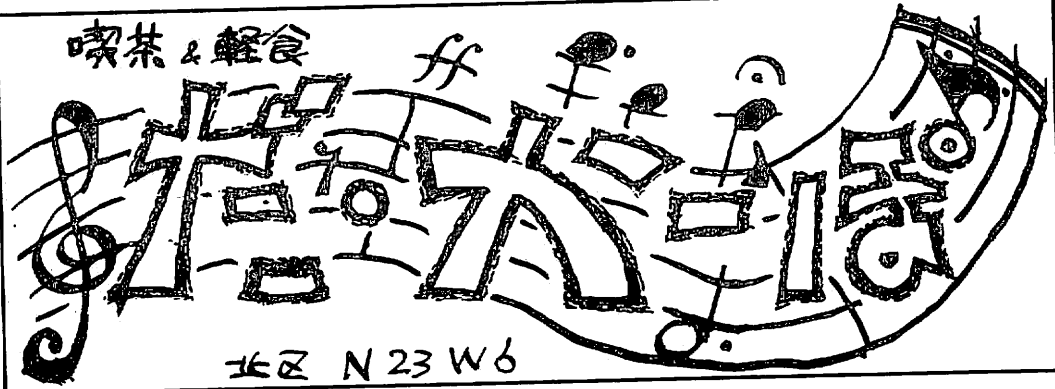
学生さん大歓迎!!

焼き鳥
ススキノ南6西3
三共ビル1F

TEL

512-2929

喫茶 & 軽食



庄内歯科

社会保険・国民健康保険
老人医療・生活保護法
指定医

歯科医師 庄内貞夫

札幌市白石区本通二丁目北八一番三七号

TEL (八六一) 二五〇四

太田装蹄所

札幌市東区伏古十条一丁目
十五番五号
TEL 七八二一六〇八四

自己紹介・他己紹介

卒業生の部

国枝保幸兄（四年目）

よく「イイ加減な奴」と言われます。本人としては認めたくないのは当然ですが、高校時代友人に真向から言われひどく落ち込んだ事もあり、大学へ入ってからあまり変わらぬようです。

本人にすれば「こんな事ではいかん」などと思っている所へ、苦言・叱言を受ける訳で、馬術部での生活は自己嫌悪の連続でした。が、反面、落ち込んでも一晩寝れば忘れるという単純な性格もあり、この性格が四年の部生活を支えたと言えます。悪く言えば「厚顔」なのかもしれませんが、今はただ「幸せな性格」に産んでくれた両親に感謝するばかりです。

らずとも遠からずといったところですが、いい加減、いい加減という、まわりの声などまったく気にせず、いつもマイペースを守ってきた兄です。昨年は愛馬ミヨコが登り調子で念願の東京へも行け、兄の活躍が目立ちました。今でもたまにクラブに顔を見せます。やはりミヨコちゃんが好きなんでしょうね。

四年間、本当にご苦労様でした。いろいろと大変だったと思いますが、全日学にも愛馬ミヨコと行ったのも良い思い出となっているでしょう。兄のように超マイペースでクラブを続けたという人も少ないとは思いますが、そのようにクラブを続けられたらいいなと羨やましがっている部員中にはいるでしょう。まあ、とにかく大学生活もまだ数年間あるのでたまには、ミヨコにでも乗りに遊びに来て下さいね。

島村 努兄（四年目）

自分は、馬術部に対して何かよい影響を残したかなと思うと、どこか穴にはいりたいような気がします。しかし、自分が馬術部から得たものは、はかりしれません。これだけは自信をもって言えます。自分がもし馬術部にはいらなかったら、あるいは、途中でやめてしまったら、何とつまらん人間になって、かつ、何とつまらん学生々活を送ったことだろう。

はっきりに言って、苦しかった。特に四年目の時は。これから、どいなかへ行って牛馬の獣医になるのだけれど、どんなことにも耐え

一見、サンングラスをかけ、車を乗り回す金持ちのドラ息子、あた

られそうな気がします。長屋さん、鉏路には豚はいません。したがって豚には騎りません。あしからず。

さようなら、疾風。おっと忘れた、卒部生の島村です。

最近、垢抜けたといわれる北大生の中で、典型的な北大チックを守り続けているのが兄です。明朗、温厚できたなさ知らず、風呂は週一回でいつも同じ服を着、髪はぼさぼさ、しかしこの頭の中は知識のかたまり、今年めでたく獣医学部を卒業（の予定）。

兄が卒部されると寂しくなります。しかし、高校時代いかにも柔道をやっていましたと言わんばかりの体つきとスキノで突如あみだした必殺わざ「サッポロコマがため」は現役部員の心に深く残ることでしょう。

江戸っ子らしくて、クールで、かっこよくて、女の子にもてる自分だと思っている様子で、時々他の部員と意見がくい違いよくぼやいています。また、新しい服を身につけた時などは、「どうだ、似合うだろう。」と言います。実際はあか抜けしていないのだが「かっこいいですね。」と言うと、うれしそうに鼻の下を長くしています。しかし、動物を愛する心、本当の人間らしさ、やさしさ、あたたかさを感じさせてくださった人でした。その兄も、今年卒業就職の為、札幌を離れる事になりました。四年間本当にご苦労様でした。

西川理一兄（四年目）

自分で自分を分析するというのは改ためて、自分の悪い所を言葉にするように恐ろしいのですが、まあなんとかやってみます。

まず、本當いうと、ぼく内気な人です。あっぱはっは。うそみたいでしょう。しかし、結構これでも人見知りするんです。それでもって、どうしても自分を繕うんですね。別にかっこよく見せようとかは全く思わないんだけど、本當は優しくもなんにもないのに優しぶりっこしたり、なんかする人です。それに自分勝手のくせにさみしがりやなんです。人恋しいというのか、甘えたなんです。それと生来怠けものに出来ていて、これがガンなんです。まあ、それでせめて何か一生懸命かけてみたいものをと思って部に入ったんですが……：性格はあまり変わっていないようですし、別に立派になつたわけではないみだし。ただただ十九に四が加わって二十三になったという気がしないでもないのですが、まあこれからの人生の三分の二を、もっと世の為人の為にいかせるようにしたいなあと思う今日この頃です。

今年卒部するうちの一人、しかし卒部＝卒業とならないのは、馬術部の馬術部たる所似か。

コンパでは、そのアホさを如何なく発揮し、毎日冗談で生きないようにしようとするものの、酒を飲むとついそのアホさをさらけ出す。

さみしがりやで だから 時には人に優しくして

さみしがりやで だから わがままで

さみしがりやで だから 正義感にあふれ

今日も小雪が降りかかる。

兄についていったい何を書きましょう。兄についてのエピソードはいくつもありますが、そんな事より、とにかく兄はどでかい存在感があったのです。

ふおーっかいどう大学ぶぁーじゅつぶ（一息ついて）しゅしょうー。そーの名もーしーかーわりーいち兄、四年間御苦労さまでした。

吉田 円 姉（四年目）

最後の思い出に、原稿の催促をされてみたいと思つて、今まで書かずにいたのだけれど、誰も何も言つてこないで、不安になつて書いてしまった。

まんまる顔に真赤なほっぺ。大きな大きなおしりに太い足。四年間クラブにいても姉の印象は変わりません。体力のみかというところではなく、いつも体から知性があふれています。姉の一番良い所はやるべきところとはことんやり、やらないといったら全くやらない事。ぐだぐだしている男性部員は、みならうべきでしょう。

年令と馬術の上達とお尻の大きさが比列してきた姉。その姉もも

う卒部。その愛くるしい百万ドルの笑顔と、その口元から飛び出す男顔負けの鋭い指摘に接する事ができないと思つとひじょくさびしいんです。しかし、姉のど根性は永く現役女子部員に受け継がれることでしょう。

北燕のサブチーフをしていた頃、北燕の骨瘤が悪化して夜中まで水で冷やしていたあの姿は忘れられません。下級生の頃、試合に出ると必ず紙と賞品を手にした勝負強さ。草刈でも作業でも姉に任せれば間違いのないという、まわりの部員の安心感。コンパでは大酒飲みのくせして、その正体を中々表わさない。理知的というか、ずるいというか、たぬきというか……。いや、やっぱりあれは、姉の都会的つつましさだったんでしょね？

ああ、自分でも何を書いたのか、わからなくなってきた。最後だと思つと、ついついほめすぎちゃうな。要するに言いたいことを一言でいえば「まだ少くとも一年、馬場のそばにいますんだから、ちよくちよく、その安定感ある姿を見せて下さい。」ということなんです。なあゝ よしだあゝ

石黒 直 秀 兄（三年目）

辛い事があつた時、悲しみにうちひしがれた時、そんな時は全てを忘れて寝てしまふのがいい。この世はいつも辛い事や悲しい事が満ちている。だから僕はいつも寝てばかりいる。

石黒のお兄ちゃんは、冬が近づくと誰よりも早くパッチをはきま

すが、部室のふとんからのぞくそのパッチの色は、なぜか黄色ばんでいます。

石黒のお兄ちゃんは夏が近づくといつもさっぱりと散髪しますが、ついでに、いやがる天ちゃんのたてがみも散髪してしまいます。

石黒のお兄ちゃんは夏が大好きで寒い冬は大嫌いです。だから今年から立派な勤め人になって東京に帰ったけれども、札幌勤務となつてとばされることを非常に恐れています。けれど、みんな石黒のお兄ちゃんが札幌に戻ってくればいいなあと思っています。

＊ ＊ ＊

黒やん、貴方はとうとう行ってしまったのですね。全身黒ずくめの一見飯場の大将風の貴方でしたが、サングラスを取った時のかわいなおめが目に浮びます。何でも笑ってごまかしていた貴方の奥底に潜んでいた深遠なる人生哲学。(そんなものあったか知らん。)

立派な土方の大将となる日を心から待っています。ゲップ
！てんりゅうやまより愛をこめて！

現役部員の部

北畑 裕 兄 (三年目)

一年の時、駅伝大会に出て十一人抜かれた。二年の時は十二人抜かした。三年目十五人抜かした。が区間賞はとれなかった。今度は、是非区間賞と、団体の入賞を！

＊ ＊ ＊

十月十日の駅伝大会で、鬼のような顔をして走って来た姿を忘れられません。兄のマラソンにかける情熱は、大変なものです。

今年度主将になりました。マラソン以上の情熱をもって、クラブをひっぱって行って下さいませ。お酒を飲んで、夜中に他人の家に電話をかけるのは、やめましょう。

＊ ＊ ＊

彼が主将になると知った時、不安を隠せなかったのは私だけではなかったでしょう。彼が物事にかける情熱、人や馬へのやさしさを口べたゆえに人に伝えられぬ点、かなり損をしているのではないかと思う。最上級生となって半年、主将としての貫禄が出てきた……という気はあまりしないのだけど、マアちょっと様子を見よう。

(最近コンパで元気を回復してきたようで、うれしいような、悲しいような……)

篠田 聖 兄 (三年目)

三年目ともなるとネタがつきてきた感があります。とにかく今年は演歌がはやって喜んでおります。一年目は馬匹で東京へ行きました。二年目は貨車積み用員でした。三年目は馬運車の運転手でした。

来年は？

＊ ＊ ＊

遠くからみるとちょっと猫背で外股で青い小さなカバンを持ってノタノタと歩けばすぐ兄だとわかります。あまり一諸に遊びには行

った事はありませんが、社交ダンスがうまいとは外見から見ればとてもビックリします。たまに冗談らしきものを言いますが、他人がわからない事もしばしばあるようです。そして普通にしゃべるとてもおもしろかったりもします。まあ、とにかく北姫号の調教をがんばって下さい。

＊ ＊ ＊

昨年十二月より、羊子からミヨ子へと鞍がえをして、女のケツばかり追いまわしている兄は、一般市民にお金をあげるのが趣味で、札幌ばかりでなく仙台市民にまで万の単位のお金をだまっておけるのです。何とやさしい人でしょう。しかし、兄はあげた後気づいてしまったと思うのですが、もう後の祭り。もらった人はすでになし。そんなこんなで十萬位は見知らぬ人にあげているのではないのでしょうか。知らない人ばかりでなく、我々にも少しはくださいな。

兄のチャームポイントは、シャツを出していることです。最近、そんな兄と同じ格好をして（もちろん無意識に）ニューファッションだという人間もいます。

とにかく、今年はミヨコで頑張ってる。

高橋 均 兄 (三年目)

この冬を何とかのりこえて、ほっとしているところです。一年の頃は特に冬のつらさは苦にならなかつたけど、やはり、何度も体験すると慣れよりも先にいやになってきます。一年の頃の上級生が、四月頃、冬のつらさはこれで終わりだといって喜んでいたので今私

にも実感となつていきます。

＊ ＊ ＊

最上級生となり気疲れが多いせいか、近頃ますます老けたような気がします。それでも口の方だけは、老いてますます盛んなような顔を合わせば口角にしわを寄せ人をばかにしたような顔をしてキツイ事を言ってくれます。

一見、さぞ肝っ玉も太いのだろうと思いきや、「僕、試合になると緊張してどうしようもない。」などと顔に似合わぬ事を言ったりします。

あと一年老体に鞭打ち、頑張ってください。部にとって大事な体。下級生は肩たたきを忘れずに。

＊ ＊ ＊

最近では「おじん」から「じいさん」と呼ばれるようになったみたいだけど、どっちにしろお年寄であることにはちがいはないのです。兄いや失礼、老と目があうと「へ」の字のような目でニコニコしながら「なんだよー」と言ってくれる単純ではあるけれど優しい先輩です。でも時々シビアなことを言われるようですが、たぶん孫のような後輩への遺言なのでしょう。こんな老もドンホッパーに乗ると外見は多少若々しくなり、なかなかの成績を収めています。最後に、ドンちゃんのおハミは毎日きれいに洗いましょう。

松岡 功 兄 (三年目)

あれこれとやらねばならぬと思いつながら、その十分の一もやるこ

とができます、なぜ一日が二十四時間しかないのかと思う頃です。

童顔がおこるほど可愛いものはない。副将になられてから、あのやさしそうな顔に奥にひめてあったかわさがにじみでてきた。

兄は、最近、貫禄をつけようとして、タバコを吸いはじめましたが、高校生とまちがえられて、補導されるのではないかと心配です。しかし、スターライトには、童顔でないと乗れないそうですからいいことではないですか。

兄はこわいけど、安心して色々相談できます。

丸々としたお顔で、髪もくるくるとし、一見かわいらしい先輩です。しかし、兄はなかなかいやらしいのです。口と実体が一致してそうなのかわかりませんが。

さて、兄は、副将・馬匹として、部員・部馬に細かい配慮を払って下さいます。馬場の中でも最上級生としてがんばっていらっしゃいます。教えを乞う一年目は、特に耳をときすましていなくてはなりません。ライト嬢との息もびったり、今年は大きく飛躍して下さいます。

井上 京 (二年目)

今、数学の再試験の勉強に苦しんでいます。あと二日、二日たてば試験は終るのです。(試験の出来にはかかわらず)それにしても、僕はあと何回、数学の試験に苦しめば学校を卒業させてもらえるの

でしょう。今度の試験を落とせば、栄光の二年連続留年の実現がますます現実のものとして近づいてきます。この苦惱こそ今の僕なのです。(苦しまぎれに書いた自己紹介でした。)

通称「キョン」、何と部犬の名前と同じなのです。「キョン」と犬を呼ぶと「ヘーイ」と彼がしっほをふってとんできます。彼のクラブに対する情熱は本当に頭が下がります。上級生も少し見ならまなければなりません。ああそれなのにそれなのに、お勉強はあんまり好きではないようです。しっかりがんばってよ。それともう一つ。ちょっと頭が堅いんじゃないですか。しかし、何といても彼の特筆すべきことは、アレなんです。そうアレですよアレ。それはね、大きな大きなオ○ソなのです。

アフリカ生まれのインドネシア育ち、小さい時から猛獣とたわむれ、疲れを知らないその身体はクラブに多大な利を与えています。作業、当番の時なども考えるより先に体が動いているといった感じ。今年も愛馬にまたがり、一つ一つ苦難を乗り越えて行くことでしょう。

折橋 由美子 姉 (二年目)

私の好きな事……マンガを読む事。踊る事。一人でギターをひく事。靈魂について議論する事。一人でぼけくつとする事。夜、ぶらぶら歩く事。寝る事。ウィスキーを飲む事。

私の嫌いな事……英語の勉強。人前で歌う事。そうじ。早起き。酔っぱらい。ビール、日本酒を飲む事。

私の性格……ドジ。怠慢。負けず嫌い。涙もろい。考えている事を言えない。

いやだ、いやだ。

今年、全員ドッペリの二年目男を尻目に、見事、獣医学部に移行しました。日頃は、自らの体を直すぐに支えることも、まぶたを開ける力さえも惜しみ、良く言えば、細かな点にあまりとらわれないおおらかな性格、悪く言えば、ずばらで、あまり几帳面でない。こんなことを目の前で言うと、不敵な笑いを浮かべ、体当りをくらわされます。しかし、一たび鞍に腰をおろすと、その小さな体ははずませて馬を駆し、下級生を走らせ、また、競技会においては、必ずエントリー料以上の賞品を取って来るという、誠にしっかりとしたねえちゃんです。

「おい、飼い付けつくれよ」「ちゃんと掃除しろよ！」なやましい流し目を使いながら言葉のふしおしに出る男にまさる男言葉は一年生を脅やかし、恐い先輩の一人となっているようです。獣医へもストレートで移行したという才女、先月も顔に微笑をうかべながら、いやがるオスヤギの大事な所を……ああいたそう！

今 由美子 姉 (二年目)

私は、本当は気の弱い女なのです。いじめないで下さい。

なんとと言っても、あの笑い方が印象的な人なのであります。笑っている時あの人の口が開いたのを見た人が今までいただろうか。あれにはなんか理由でもあるのかな？ それと、クラブ内では、なかなかおもしろくて人当たりもいいんだけど、一步部の外に出ると挨拶をしても、挨拶をかえしてくれない。冷たいですよ。今さん。」他人から聞いた話では、当番の時、いつも飼付けをつくっているそうで、「飼付けの今」の異名をとっているそうです。

普通の女の子のようだ。ということは「化粧っ気がなく、スカートをはかず、頑丈で、男と見紛うような」馬術部的女の子ではない。しかし、これはあくまでも外観であり、中身は不可解である。この人の中で、馬術部は如何なる位置を占めているのだろうか。仲間が減っていく中で、飄々として馬に乗り続けている。

飯野 秀之 兄 (一年目)

物事は中庸が良いと言います。それを確かめようと鞍数も十一人中六番目。とにかく手を入れず、手を抜かず？ のマイペースでも、うまさは……体がブヨブヨしているせいか、他の人よりもよけいにやらないとダメみたいです。

馬術部員の中では珍らしく数学ができる。又、毎日、数学のお勉

強のほかにも、ものまねの研究をされているとか。研究成果は、コンパで発表される。最も得意とする所は、片寄さんのものまねである。

＊ ＊ ＊

彼は馬術部の天才少年であります。入部当時はでっばっていたお腹も、日々の肉体労働の甲斐あってか引っこみスマートになりました。歌を歌えば、女顔負けの美声。馬上では……以前はもじやもじや頭をなびかせていましたが、それも最近すっきりした、とだけ紹介しておきました。何でも無難にこなせる人かと思いきや、一つだけ苦手なものが（嬉しくも）ありました。将来馬運車をひっくり返さないように、自動車学校でしっかり鍛えてもらってネ。

石井洋行兄（二年目）

大きな色眼鏡をかけ、マラソンを大得意とするのが僕です。最近少々腹が出てきたのが悩みの種です。運の良さとずうずうしさだけで歯進に入ったと言われますが、本当はすごく繊細な神経の持ち主なんです。

＊ ＊ ＊

一年目の中で、遊びの総大将格。歯進という将来の約束された（ま、本人次第なのでしょうが）所にいるので、皆の羨望の的。最近はその部もほどほどにして遊び歩いている様子。この前は酔った勢いで女の子に抱きついたし。（コンドナンカオゴレ）そのくせ、なぜか馬術部色の濃い人間でもあります。今、鞍数は一年目で四位。」

たいまん」の汚名をきないようがんばりましょう。

＊ ＊ ＊

一年目きっての遊び人？であるかもしれないが、中々、図々しい根性がありそうです。その根性は、忙しい歯進にしながら、雨にも負けず、風にも負けず、クラブの個人バイトを入部したての頃からせつせと行ない、これまた雨にも負けず、風にも負けず、せつせと夜のスキノに通った姿を見ればわかります。最近では、文化という大切な役職について遊べなくなったと嘆いておりましたが、それもいんじゃないんですか。身をもちくずさずにすむでしょう。

でも、とっても情の厚いやつなんです。その情の厚さは兄の口唇をみればわかります。コンパの席でその厚い口唇から漏れ出する歌声とその口唇を見るとぞくぞくしてきます。

きつと今に何かやってくれるだろうと心から期待しています。クラブのことを彼は彼なりによく考えているようだから。

小泉清重兄（一年目）

小泉自己紹介

雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケズ

...

ミンナニデクノボウトヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイウモノニ

ワタシハナリタイ

✽

✽

✽

小泉君へ

急にこんなお便り出してゴメンナサイネ

私、あなたに初めてあった時から好きになってしまったんです。

最初背が高く無口な人だなと思っていたのですが、そのうち、うちとけてくるにつれて、あなたは本来の姿を私達に見せて下さったんです。そうです、それはあなただけにしかできない事（他の人はアホらしくてやらないのかも）。そうです。ゾウさんの物真似です。それもあなたは、にこやかにアフリカゾウとインドゾウを区別して真似ることができるとですね。なんて素晴らしいことでしょう。それにあなたはあのオオカミの真似もできるのですね。あなたのお父さんはターザンですか？ あなたはアフリカ生まれにもかかわらず、ハッタイコとホッケが好きなのですね。（クスッ、かわいい）

それじゃ、またお便りします。

限りなくアホに近いどんくさいアナタへ

✽

✽

✽

アナタのR子より

クラブのために留年すべきかどうか悩んだ兄は、そのために生物の実験を逃げ出したりしたのですが（これは嘘で、もちろんかえりが恐かったから）、どうやら今年で函館に行ってしまうそう。

ああ、オオカミがどこで泣いている……。

斎藤 牧 人 兄 （一年目）

はたちになった僕の持つ経験の中でも「馬術部」は一種独特であり、馬の顔、手網の感触、日夜のバイト、恐怖のミーティング、その他もろもろの微妙なバランスが何とも言えずいいのです。その微妙なアンバランスが何とも言えずくだるい時もあります。でもやっぱりいいのです。一年目の斎藤です。よろしく。

✽

✽

✽

ちょっと縦に長く成長しすぎたようで、彼と話をする時は上を見上げなければなりません。体が縦に伸びた分、目と口は横に伸びた様で、大きな体で細い目をさらに細めて広い口をさらに広げてニヤリと笑ったりしますと迫力が満ちあふれます。声を出すと声帯のどこかに穴があいているようで、話をするときいつはどこかちょっと抜けているんじゃないかなと思いきゃ、なかなかどうして、しっかりと抜けています。でも馬に關しては結構やる気があるようできっと将来馬術部の大きな力となるでしょう。

✽

✽

✽

一年目の長身コンビの一角である兄は、本当に背が高いのです。羊蹄などに乗ると右のカカトと左のカカトが馬の下腹を通してくっついてしまうほどです。兄の後に乗った、ある女子部員などは馬装点検の時に八穴縮めてもまだ長いと言ったほどです。兄が羊蹄に乗って速歩をすると十字架が横に動いて見えます。ちょっとボケている所がありますが本当はもっとボケているのです。彼に言ってみて背くなる言葉は「足が長いね。」という我等にはうらやましい一言なのです。

築地和彦兄（二年目）

北海道で馬に乗るのも悪くない。とそんな軽い気持ちから入部したら、そうは問屋がおろさなかつた。どっこい障害は重かつた。実にカマボコは重かつた。それらなんとか持ち上げることができるようになつた今日、この頃。少しは僕もたくましくなつたのか。

一年目勤勉トリオ唯一の男である兄は、とてもまじめではありませんが、他の二人の兄（いや他の二人は女性でありました）とは異なり人間の弱さを持つた人であります。「ああ、つかれた」とか「いかなア」を口ぐせとしていた兄も最近では、自分に正直になり休むところでは休むようになり、彼も人間らしくなつたと他の怠慢な人間から、喜ばれています。

彼のことを思うと、いつも影武者の撮影所を思い出す。大きなマキシムに小さな彼がまたがり、先頭を切つて走っていくあの姿。「すみませんノどいて下さい。」マキシム、おもしろかつたでしょうね。

もう一つ思い出すのは、新歓コンパ。

「吐いちゃって、すみません。すみません。」

「日高合宿が終わつたら、僕はみちがえるように、たくましくなつて帰ってきます。」

本当に、いるだけで楽しくなるような人です。

平田委久子姉（二年目）

ずぶとさと無知ともの好きとめんどくさがりとお人良しと考えすぎを混ぜ合わせると私のような人間ができ上がるのでしょうか。最近、飛び乗りと口笛に自信をつけていたのですが、寒くなつてまたできなくなつてしまひそうです。今年は、もう少し高い目標をもちたいのですか。

昔々ある所にりんごのようなホッペタを持った女の子がおりました。やがてすくすくと育ち、柔道・剣道・お菓子作りで鍛えられ、馬にも乗るようになりました。自転車にも乗りましたが、それはなぜか半年でこわれてしまひました。コンパでは「桃太郎」「金太郎」を始めとする童謡シリーズで某部員の「動物シリーズ」に対抗するまでになりました。やがて……。

どんなに遠くから見てもすぐに姉だとわかります。あのまん丸お月さんのような顔が姉のトレードマークですから。……

姉はなかなかのガンバリ屋でマラソン等は大の得意との事で、一年目のI兄などは問題にならないとの事です。また、冬には毎日毎日すもものような真赤な顔をしていたためにコンパでは桃太郎になりきつてしまつていました。これからも今の調子で勉強にクラブに頑張つて下さい。

間正理恵姉（二年目）

母が言います。「おまえ、人に何か頼まれたらね、どうせやっ
あげるのだったら、最初から素直に『はい』と言ってやればよいで
しょう。そのほうがずっとかわいいのに。」

「かわいい」なんて、生涯に一度、一人の男性から言われればい
い言葉。今は「強い」という形容詞を得るべく、日々努力していま
す。

おわかりでしょうが、まったくかわいいげのない、二十才になりな
んとする少女、それが私です。

怪力間正だなんて誰が言ったのか知らないけれど（オレが言った
のか）国枝の電気がまのふたをはずしたのはあれはちょっとしたは
ずみだったんだよな。そうだよな。ちょっと力をセーブするのを忘
れただけだよな。

最近間正はパーマをかけてきました。女の子のくせに。パーマな
んていうのは男だけがやるもんだと一年目を見て、そういう風に思
っていたのに。しかし、それがまた何とおうか、顔が黒くて毛が
短いのでチビクロサンボのようなのです。きつと南洋へ行けばもて
るでしょう。

彼女の怪力の秘密は、なんといってもあの猛烈な食欲にあるので
すが、もう二十になっただから少しはだんごばかり食っていない
で花を見て色気をつけて下さいね。

部員の中で彼女におこられたことのない人がいるとすれば、そん
な人はモグリです。毎日の練習といわず手入れといわず作業といわ
ず、やる気十分で臨んでいます。最近、「作業をけん命にやった
後のさわやかさは最高ね。手を抜いた人がかわいそう」とおっしゃ

られ、馬術部に『間正語録』として残したいという提案が成されま
した。が、退部者が続出するのではないかと不安もあります。
何か話すといえれば必ずといっていいほど馬の話です。頭の中は馬
のことで一杯なのでしょう。本当に純情な人なのです。

増田 美希夫 兄（一年目）

一年目の必殺遊び人トリオの一角です。一年目の芝高コンビに連
れられて六月頃に生まれて初めてデイスコに行った。それからとい
うもの……。また、一月頃からボーリングに凝り出してしまい知
らない間に毎週重い球を投げて……。

兄を語るには、まずなんといってもコンパでしょう。酒は弱いく
せに、好きで、目がすわっているっぽくなったと思ったらもうたい
へん。「酒くれー。」を連発して、酒を離そうとしないのです。こ
んな酒乱はまずないでしょう。でも普段は、といっても気がいいの
です。少々怠慢ではあるけれど。

彼の酒乱はかなり有名で、OB諸兄にも広くゆきわたっています。
なんせ、新歓コンパの翌朝に目がさめたら、乾草のひもで手足を縛
られていたのですから、それがあるせいかな、最近の水割二杯で我慢
しているそうです。彼も人には迷惑をかけてはいけないと反省して
いるのでしょう。

馬の部

スターライト号

気が強くて負けず嫌いで、きれいな好きで、お高いライト。シュバルが大嫌いで、あの白い姿が目につくと、すごい形相で向かって行きます。

でも利口でやさしいところもあります。顔をさし出すと、チョンチョンとつついて餌をねだるあの仕草はともかわいいです。ただし、餌付けの前にイライラして、首を振ったりお手をしたりし出すと、人間の方がハラハラオタオタしてしまいます。やはり、ライトの機嫌を損ねないようにするには、気を使うのです。

ちっちゃな体ですが、迫力のある経路回りを見せてくれます。太めなのがちょっと気になりますが。来年は貴女の力を充分に發揮して下さいよ。

羊蹄号

いつも元気な姉です。元気すぎると言っている人もいます。とても一児の母とは思えません。でもそんな姉も最近体重が減って来たのが気になります。餌付を待ちながら、ねわらをかじる姿のいじらしさ。

今年は、元氣一発東京遠征を期待しています。では。

疾風号

栗毛のつぶらな目をした可愛い馬です。馬房の前では、皆トキ、トキと呼びながら、ペロペロなめさせては、燕麦をやっています。しかし、蹄洗の時、へたしたらジャージを引き裂かれる事もあります。とぼけた馬なのでしょうか。曳き馬では、急にキューンと鳴いて走りだそうとします。しかし、いざ上に乗っかってみると走りだすどころか、我々一年目にとっては重い馬でノロノロ歩いてばかり。今は、足が悪いけれど、早く直って活躍してもらいたい馬です。トキ、頑張れ。

天竜山号

顔、スタイル共に、「これぞ馬。」と言いたいような均整のとれた美しさを持っている。初めて、夕方の餌付前のほの暗い厩舎を訪れて黒く輝く彼を見た時、「こんなにきれいな馬が、こんな所に……。」と思ったものだ。天ちゃんは見知りする。入部したての一年目が、おっかなびっくり身構えているのに不信感を持つらしく、最初は燕麦をやってもおいしそうに顔一つしてくれなかった。ブラシはかけさせてくれない。体温計は入れさせてくれない。蹄洗台で横に立つと噛んでくる。馬に噛まれた傷痕が三つ。三つとも天ちゃんのカスマークだ。重いことにも定評がある。自由練習で乗せてもらったのはよいが、あっちよろよろこっちへよろよろ、動いているのか止まっているのかわからない。蹴っても何の反応もないのにたま

りかね、手で尻をたたいて笑われた。気の強い天ちゃんだが、勝てないものがある。鞭、ヒラヒラした物、それとパリパリいう音だ。新しい冬用コートのフードの白いボアが、恐くも何ともない物で、中身は前と変わらぬ私なのだとかわかってもらうまで、ちよっぴり時間がかかった。

一方通行に、わずかながらも手応えが生じてきたのは、やはりサブについて毎日曳馬や手入れをするようになってからだ。思いやりのある、やさしい天ちゃんである。もし人間だったら、恋人にしたい天ちゃんである。石黒さんが大好きで、バイクの音に耳を澄ましている天ちゃんである。

ドンホッパー号

やっばり馬もチーフに似るんだろう。この馬も他分にもれず、やっばり高橋兄に似ているところがあるように思える。あのいやらしそうな笑い方（高橋兄ゆるして下さい）、あれなんかは典型的な所ではないだろうか。でも、一たび装あんされて、はみをかけられた時のあのりりしさ(?) もその一部で、高橋兄に乗られて障害を躰び、馬場を駆けめぐる姿には、本当にほれほれとしてしまう。やっばり、北大馬術部の看板的存在だから、他の馬からも一目おかれているような気がする。

でも、あの人をばかにしたような笑い方は、本当にかわいげがない。(まあ、それは僕に対してだけのようない気がするが)

以上、ドンの紹介おしまい。

北 燕 号

今度、離脱しました。彼の魅力は、障害をおちこわしてもかえってくるころでした。曳馬もおとなしいし、芸も多才だし、みんな牛だというけれど、北大の歴史を背負ってきた馬にはかわりのないと思います。彼は日高ケンタッキーファームで観光客相手に人気者になるでしょう。

北 楽 院 号

みんな僕のことキユウと呼びます。昨年の八月までは足を怪我して皆様にご迷惑をおかけしました。でも、今ではもうすっかりよくなり、元気に走り回っています。最近は何れメンをやってもあまりエサをくれる人がいません。もう新しい芸を考えないとダメなのでしょうか。僕は部内一の食いしんぼうなんだから、もっと燕麦くれないと引き馬の時走ってやるぞ。

北 姫 号

全体は濃い茶色で、たてがみとしっぽが黒に近い茶色、そして顔のまん中が逆三角形に白くなっています。鼻すじも、まん中がたてにずっと、そして先に行くくと右に寄って、白くなっています。この

くつきりとした白さですぐにみよことわかります。顔つきはとても愛くるしく、目がくるくるっとしていて魅力的です。馬場でも、悩まし気な流し目を使いながら歩く姿が見られます。脚はすんなりと細く、何だか、こんな重い私に乗っていいのかな……と思ったりして。蹄鉄をはめてもらうために素足ならぬ素蹄になった時のみよこの脚は、それはそれは華奢でいじらしい程でした。

この三月で六歳の誕生日を迎えますが、当部にあつては若手、人生はこれから、といった所です。けれど、あと十年もたてば、誰もが彼女の死が近づいている事を思いやる時を迎えるはずなのです。時は移り、人は変わります。

北 将 号

白い馬から連想される高貴、優雅などという言葉のあてはまらない馬。慣れない一年目はだれでも、一度や二度シュバルから熱いキスを贈られ、地面をころがり回って喜んでいきます。でもその傷あとは馬術部員の歎しようです。

その姿は白鯨であり、目は人間の瞳をもつというかい物で、みんなに恐れられ、今だに近づこうとしない人もいるほどです。

素質がある馬のようでもあり、しょうもない馬のようでもあるわけのわからない馬ではあるが、しかし、かみつかれた者だけが彼の内なるやさしさを知ることができるのですよ。

北 驢 号

一年目が入部した時、二年目がガキを恐れているのを見て皆不思議がったものです。でも今では、ガキを扱える人に、尊敬のまなざし。人をおもちゃにするあの態度、全く油断もスキもありません。

「馬房の中に居る時はかわいいんだがなあ。」同感同感。

朝は寝ぼけてボーッとしているけど、なかなか利口そうな瞳をしています。かわいいうようで、ずる賢い。ずうずうしいのかと思うとかなり繊細。又、馬房抜け、パドック破りの名馬。2番目の馬栓棒のその下をくぐりぬける柔軟性は、彼だけのものでしょう。不思議な馬です。本当に馬なのでしょうかね、ガキッチョ。

北 美 号

「メーちゃん、メーちゃん」と呼びたくなる程かわいい馬です。部員のみなさんは、あまりこの馬のかわいさをわかっていないようです。大変憶病であります。馬格が大きく美しい馬です。エン麦を食べるのがヘタで、最後の一口は人間の手のひらを咬んでしまいます。たまに馬けい台につないでおくどピッコになります。あれは我等人間を驚ろかして遊んでいるのです。このような愛嬌がある馬をこれからは皆さんでかわいがってやって下さい。

北皇子号

今年新しく競馬場より入厩した栗毛の騙馬です。愛称は「ギヤラン」だけど「ハーバーミート」とか「やらずのホッパー」と一部ではいわれています。去勢をしたのだけど、西川兄や篠田兄を蹴ってしまつて怪我をさせてしまいました。今度は、大地を強く蹴つて、「やったのホッパー（ドンホッパー）」のように高く跳んですばらしい馬になるよう期待してます。

北耀号

僕はピーター。最近、天龍親分の角刈り、ドン君のモヒカン刈り等短髪が流行っているみたいだけど、何と言うか、うん、ナイーブな僕にはやっぱり自然な長髪が似合うみたい。
恥かしながら、僕は自他共に認める北大のホープだから、とにかくがんばるよ。



塩野屋

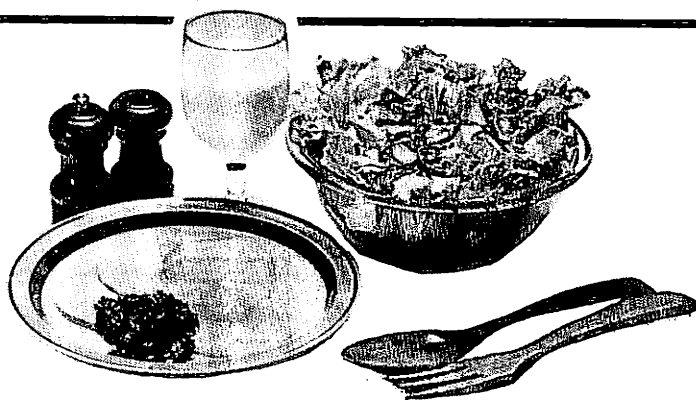
北18西4 北18条ハイツ地下

飲むほどに
酔うほどに……





大地から、食卓へ。



あなたの食生活を、より豊かに、楽しいものに…ホクレンは食糧問題をはじめ、生産・加工・流通など、農協と手をたずさえて真剣に取りくんでいきます。

大きな自然と——明日へ。
ホクレン

< 広告主への感謝のことば >

このたび昭和54年度北大馬術部部報発行に際し、絶大なる御援助をいただきました諸社・諸店に対し、厚く御礼申し上げますとともに諸社・諸店の御繁栄を祈り、ここに深く感謝致します。

北都交通	ホクレン	日高ケンタッキーファーム
U H B	フロンティア乗馬クラブ	北大モータース
やまわショッピングセンター	札幌競馬場	競馬ブック
ひでちゃん	日特建設	太田装蹄所
庄内歯科	雪印パーラー	きよた
ちえ	北都館	塩野屋
ダカーポ	誉御殿	十字屋
山禮	大八	とんこ
大将鮎司	協栄生命	北龍
札幌メダル商会	政鮎司	テアトルアポロン
イレブン	川端商店	日特建設
義経	平田金物店	オニオン
ホシ伊藤	ぼんち	つちの
正本鮎司		順不同

コンパ、クラス会に
雪印パーラーの
三階会合席を
ご利用下さい。

1,500円より種々調製
致します。

5.6名様より70名様まで

 雪印パーラー

中央区北3条西3丁目
☎251-3181

川端商店

和洋酒・煙草・食品

札幌市北17条西4丁目
TEL 七四二・〇三八八

とんかつなら味の



北区北18条西5丁目 TEL 742-5809

つちの酒店

12 PM

TEL 711-2575

月曜定休日

酒10本で1本サービス!

鉄板焼

焼そば

お好み焼

居酒屋 ち え

北17西4 カネサビル TEL 741-3136

やきとり界で常に躍進する大八グループ

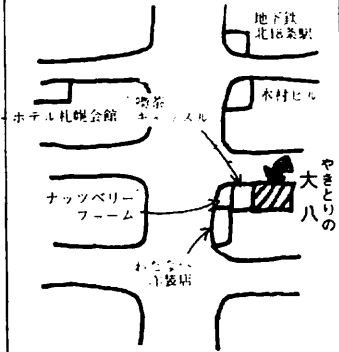
やきとりの大八 地下鉄北18条店

地下鉄18条店 札幌市北区北17条西3丁目 TEL721-4908

本店 札幌市東区北10条東1丁目 TEL742-7364

本町店 札幌市東区本町1条3丁目 TEL782-8992

栄町店 札幌市東区北41条東1丁目 TEL751-8689



北 龍

ラーメンなら

北18条西6丁目
TEL742-1376

江戸考

割烹一品料理

政壽司

本店 小樽市物見所畔
電話 011-200011
支店 札幌市南二条二十四丁目
電話 (51) 040051 / 2037

北海道名物

ジンギスカン専門の店

義経本店

札幌市北18条西5丁目

TEL (721) 一七二三

義経本店

寿司、鍋もの、天ぷら（出前迅速）
各種御宴会・御会合等承ります。

大将 鮎

北区北十八条西四丁目
TEL 七四二一七二〇二

●学生さんにはジャンボなにぎりで、ネダンは同じ。

●コンパの予算は

一、五〇〇円～三、〇〇〇円まで

午前十一時三十分～午前二時

舌鼓

鮎の正本

北一六西四北向 ☎七四一四二三一

金物は何でもそろろう

株式会社 平田金物店

札幌市北区北一八条西四丁目
電話 七四二一七六一六
電話 七一一七五三六・九九五五

コーヒーハウス

北都館

札幌市北区北17条西5丁目 ☎712-0787



ボリューム満点
コンパもできます。

やきとり きよた

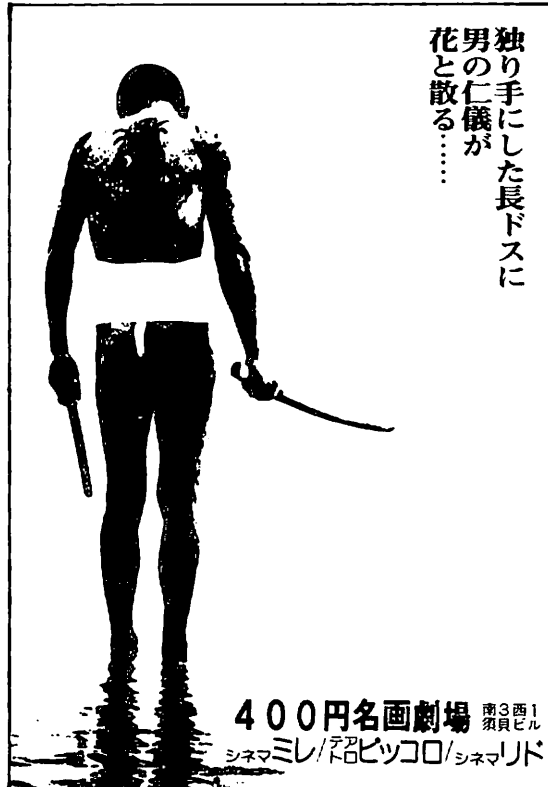
札幌市北区北17条西5丁目北向 電話 742-7000

手造りのパン 洋菓子

有限会社 ジュウジ屋

札幌市北区北17条西4丁目

電話 741-5332番



独り手にした長刀に
男の仁儀が
花と散る……

400円名画劇場 券3巻1

シネマミレ/アピッコロ/シネマリド

編集後記

はじめに、これほどまでに発行が遅れてしまった事を深くお詫び申し上げると共に、ご協力をいただいた半沢先生、小池部長、岡田監督を始め、諸先輩、広告主の方々、そして現役部員諸兄に心からお礼申し上げます。

秋に編集責任者（実は僕の上に世を忍ぶ編集の大御所松岡兄がおられたはずなのですが）に決った時には、四月発行の予定であさかにも樂觀的な僕でしたが、年が改った頃には早くもその目標は音も立てずにくずれ去り、樂觀から悲観、あせり、最後には恐怖にまで変わってゆきました。全く面目ない次第です。

残念な事に、これまで部馬として貢献し、特に今年度、昨年度には西川兄と共に全日学でも奮戦した北燕号が今年離厩しました。その一種ユーモラスな風貌で人気馬でもあっただけに、さびしくなります。今は日高ケンタッキーファームのご好意により当地の観光客用乗馬となっております。つばめ君、元気で！

また、不幸にも、一昨年離厩し繁殖牝馬として余生を岩手県遠野で送っていたハイエイム号が死亡したとの知らせが届きました。ここに、彼女の冥福を祈り報告いたします。

ところで、明るい話題として、北皇子号、北耀号の二頭が入厩した事をお伝えします。北大馬術部の次の世代を担う馬に成長すると部員一同信じております。

遅ればせながら、校正が終了しました。今は只、一日も早く製本が仕上げるのを待つだけとなりました。不謹慎ではありますが、肩の荷がおりた、というのが本音です。でも・・・いい勉強になりました。
(文責 齊藤)

編集責任者 松岡・齊藤
編集委員 一年目全員
表紙カット 間正 理恵

部報 第二十五号

昭和五十五年七月 発行
発行者 北海道大学 馬術部

札幌市北区北七条西六丁目
北大体育会内

TEL (〇一一) 七一一二一一

内線 五五九七

編集者 部報編集委員会
印刷所 北大生協 北大印刷

非売品

安全・親切・快適

全日空限定乗合・一般観光貸切・一般乗用の

北都交通株式会社

取締役社長 武田忠幸

本社 札幌市豊平区月寒中央通り11丁目7-46
☎853-2191
バス手配 営業☎853-2181
総務・経理☎853-2191
ハイヤー営業所 札幌市西区八軒10条東5丁目
☎代表711-4181
バス営業所 札幌郡広島町字大曲184の8
☎01137-7-3855
貸切バスセンター 札幌市豊平区月寒中央通り11丁目7-46
☎853-2181